

龍
娘
悲
譚

第
二
部



逢はずして 今宵明けなば 暁の

光に夢と 消ゆるべきかな

枯れ朽ちた森の奥に、その泉があった。

灰色に沈んだ色彩の中、その泉だけは異様な輝きを放ち、時を止めた森の中、唯一意思を持って生きるもののように、確かな光彩を縁取っていた。

その森から半時ほど離れた土地に、小さな郷があった。

都からは三日ほど離れた気風穏やかな郷である。

近くには細いが美しい川もあった。

川は郷の命脈である。

郷は川で取れる珍しい石を磨いて行商と産物を取り換えたり、川から引いた水で田畑を作り、自分たちの食い扶持や、都へ納める租に充てて生活を営んでいた。

しかし、日照りの続いたその年に、川はすっかり干上がってしまった。

旅の僧に祈祷してもらい、郷でも踊りを捧げたりしてみたものの、一向に雨の降る様子もない。そうしている間にも、郷では餓死する者も出て、いよいよ深刻な状況になった。

「灰の森に、泉があっただろう」

郷に住む一人が言った。

緑の息吹に見離された彼の森を、この辺りでは灰の森と呼んでいた。

「雨が降らないのは泉に住む龍神が怒っているせいではないか」

「ならば、供物を捧げて、神の怒りを鎮めよう」

「しかし、ここにはもう捧げられるようなものなどないぞ」

「祈祷も踊りも届かなかった。ほかに、捧げられるものと言えば……」

郷の者たちは額を寄せて沈鬱な顔で頷いた。

下された決定は、郷の中の一軒にもたらされた。

そこには、まだ若い夫婦と、生まれたばかりの赤子がいた。

「私たちの子どもを……」

郷の決定を聞いた夫婦は青ざめた。

「皆のためだ。それに」

と、白羽の矢を携えた郷人は、女に抱かれた赤子に目をやり、苦い声で告げた。

「このままでは、その子とて瘦せ衰えて死んでしまうだろう」

赤子は怯えるように、弱々しい声で泣いた。

夫婦はうな垂れた。

母親は赤子を守るように、ぎゅっと抱きしめたが、次の日には、その腕を無理矢理引き離されることとなった。

日照り続きにも関わらず、泉はその円弧に縁々と輝く止水を湛え、真昼にも関わらず月を呑みこんだような白い冷たさを水面（みなも）に張っていた。

泉を取り囲む木々に緑はない。落葉の季節でもないのに、枝を覆う葉は一葉も余さず枯れしぼみ、乾いた風にかさかさとなかなか音を立てるばかりだった。

草も花もない。灰の積もったような、湿り気を含んだ土を踏んで、郷人たちは急ごしらえの舟形の御輿を掲げ、泉までやって来た。

御輿の上には、赤子が一人。

まだ言葉も知らず、両親の顔だけをようやく覚えたのだろう大きな瞳を見開き、重なる枝の合間に見え隠れする灰色の空を見上げていた。

やがて泉の縁にたどり着く。

祈りと共に、男たちの手で、赤子は木彫りの舟に乗せられたまま、泉の中央へと押し出された。赤子の父の姿も、母の姿も、そこにはなかった。赤子の舟を手放した彼らは、俯きがちに、そそくさと、まるで振り返ることを怖れるように、早足でその場を離れていった。

赤子に乗せた舟は泉の中央で、不自然にぴたりと止まる。

水の輪が、音もなく、けれども静寂に響くように幾重にも広がった。

白い泉の水面から、白い女性（によしょう）の姿が立ち上がる。

赤子は声も立てず、指先も動かさず、ただ無垢な目を見開いていた。

「――」

空気に洩れた、わずかな言葉の気配。

白い彼女の指先が、赤子の頬を撫でた。

その後、その土地に雨が降ったのかどうかは、伝わっていない。

リュウトは午睡から目覚めると、片腕ずつ腕を伸ばして、さらに背骨をぐう、と伸ばすと大きな口を開けて欠伸をした。その拍子に、腹の音がぐうと鳴る。

「お腹が空いちゃったな、と」

弾むように立ち上がり、軽く背中と尻の土を払った。

すぐ前に、陽光を受けて輝く泉がある。

その泉に、彼は声をかけた。

「母さま、ちょっと出かけてくるよ」

彼が声をかけると、風もないのに、水面が揺らぎ、やがてゆらりと白い女性が姿を見せた。水面に爪先を浮かせ、青年と呼ぶには未だ幼さの残る彼を見下ろす。

「また郷へ行くのかえ？」

冷たい声で問うた。

彼女は、リュウトが最近森を出て、頻繁に近くの郷へ行くようになったことを快く思っていないのだ。しかし、若いリュウトがこの枯れた森で過ごすには、一日はいささか長すぎた。つかまり立ちをしなければ歩けない子どもでもないのだ。

「だって、お腹が空いたんだもの」

軽く、リュウトは肩をすくめる。

「食べるものなら、我がやろうに」

「木の実も魚も飽きちゃったよ。それに、ここは退屈だし」

リュウトの言葉に、彼女は眉をひそめた。

「聞き分けのない、悪い子だね。愛すべきは静寂で、騒々しさは忌むべき以外の何ものでもないというに」

「母さまは、泉から出たことがないから知らないだけさ。郷には、面白いものがたくさんあるよ。一緒に来た方がいいのに。おいしい実のなる木とか、綺麗な花の咲いてる場所とか、たまに、変てこな芸をする人がいたりもするんだよ。俺が何処だって案内してやるよ。ね、それが良いよ。行こうよ、母さま」

リュウトは笑って手を伸ばす。

「我は行かぬ」

ぷい、と彼女は顔を背けた。

「何だい。分からず屋の母さまだなあ。そんなら俺一人で行くからね」

リュウトは背を翻し、跳ねるように駆け出す。

「早く戻ってきいや」

その背に、心配そうな声がかげられた。

「分かってるよ」

振り向かず、リュウトは片手を上げる。

「……分かっていないよ、お前は」

ふう、と彼女は疲れたような息を吐くと、水音を一つ立てて、溶けるように姿を消した。

郷までは、リュウトが走れば半時もかからない。

郷近くまで一息に駆けてきたが、柿の木を見つけて足を止めた。腹ぺこだったリュウトは早速それをもぎ、あとは食べながらゆっくり歩いた。

柿は甘い。

泉の傍に、こんなに甘い実のなる木はなかった。

お土産に、母に持って帰ってやろう、とリュウトは思う。泉から離れようとしないうちは、きっとこの甘い果実を知らないのだろう。

泉の森は、春になっても花は咲かず、緑も芽吹かない。永遠に冬のまま、時を止めてしまっているかのようだった。

冬は寒く、とりわけ静かなので、リュウトはあまり好きにはなれなかった。

春のほうが良い。

けぶるような陽射しは長閑で、鳥は歌い、草花が世界に色をつける。全てが始まっていく、明るい予感に満ちた春は、柔らかな空を見上げるだけで幸福な気持ちになれた。

そんな幸福を、母にも分かってほしかった。

次の春が来たら、強引にでも彼女を泉の外へと引っ張ってこよう。秘かな企みに、胸の内できすりと笑う。

風が吹く。

冷たい。

春の前にはこの冬を越えなければならないのだ。

突き抜けるような青い空を見上げ、リュウトは白い息を吐いた。

うんと高いところを、雁の群れが綺麗な列を成して飛んでいく。

リュウトは目を細めてそれを見送って、柿の種を吐き出しへたを放ると、負けじと風を切るように駆け出した。

空気は耳を切る冷たさだ。けれども、その鋭さが清新で心地よい。

無造作に伸びた髪が、風を纏う。粗末な服が乱暴にはためいた。

しなやかに地を駆け抜けて、楽しげにリュウトは笑う。

大地も、風も、空も、彼のものだった。

乾いた葉がくるくると踊り、彼の脇を抜けて空へと舞い上がる。

リュウトも笑ってくるりと回り、幅跳びをするように屈伸して、大きく一つ跳んだ。

身軽く両足で着地して、両腕を天に掲げる。

「到着ー」

郷は目前だった。

匂いが変わる。人肌と、火の熱の匂いがした。風と木々のざわめきに代わり、言葉と笑い声が聞こえてくる。うきうきと、リュウトは足を踏み出した。

三十戸ほどの、小さな郷である。

秋の収穫もとうに終え、農閑期を迎えた郷には、ゆるやかな空気が流れていた。

「あ、リュウトだー」

歓声と共に、賑やかな声が駆けてくる。

郷の中でも年少の子どもたちだった。

「おっ、と」駆けてきた勢いで突進されて、リュウトは一步よろめいた。「元気余ってるなあ。よし、今日は何して遊ぶ？」

「へっへっへー。今日はリュウトと遊んでやる暇なんかないんだ」

先頭を切って突撃してきた男の子が胸をそらして、にんまりと笑う。

「ええ？」

なになに、とリュウトは瞳を輝かせて首を傾げた。

「仕事があるんだ」

「森に木を拾いに行くの」

「木なんか拾えないよ、薪を拾うんだ」

「茸も探すんだよ」

子どもたちが口々に言う。

仕事を任されたことに、どの子も皆、誇らしさを隠せない様子だった。

「楽しそうだねえ」

リュウトは少し羨ましそうに唇をかむ。

「リュウトも一緒に行くか？」

「え、いいの？」

「足手また、足とま、足まとまいにならないなら、連れてってやる」

えっへん、と最初の男の子が腰に手を当てて言った。

リュウトは瞳を輝かせる。

「おうい、何してる。行くぞ」

その時、大人の男が一人、やって来た。大きな籠を背負っている。子どもたちを引率する大人なのだろう。リュウトに気がつくと、彼はじろりと胡乱げな目で睨んだ。リュウトはきゅっと、唇を引き結ぶ。彼に限らず、リュウトに対する郷の大人たちの視線は、好意的とはいいがたいものだった。

「リュウト、一緒に行こう」

子供たちの一人がリュウトの手を引いた。

「あ、」

頷こうとして、リュウトは男が口を開きかけるのを見た。

彼が何かを言う前に、リュウトは首を横に振る。

「やめとくよ。足手まといになっちゃうから」

ええー、と子どもたちは不服そうな声を上げた。

リュウトは黙って笑う。

「早く来い」

男の促す声に、子どもたちは不承不承従った。

何度か振り返って手を振ってくれる。

リュウトも手を振り返した。最後まで見送ってから、リュウトはちえっ、と舌を打つ。

「つまんないの」

唇を尖らせて言う。

顔を上げると、事の成り行きを遠巻きに見ていた何人かが目を逸らした。

楽しかった気を挫かれて、リュウトは郷へ向けていた足を返した。

そのまま郷のほとりを流れている川へ向かう。

珍しいことではなかった。

「泉から来た」

そう、リュウトは屈託もなく言っていた。

どうもそれが郷の大人たちから奇異の目で見られる原因らしい。

リュウトの住む泉のある森は、郷の者たちには『灰の森』と呼ばれ、禁忌の森として立ち入りを戒められている森であるらしかった。神の住まう地であるから、ということらしいが、リュウトにはよく分からない。

とにかく、目を合わせないよう、声をかけられないよう、郷人たちがリュウトを遠ざけていることだけは分かった。

それは確かに気分の良いものではなかったけれど、郷には興味を惹くものがたくさんあったし、子どもたちは垣根なく一緒に遊んでくれた。それだけで充分、郷に来ることには価値があったのだ。

郷の近くには、一本の細い川が流れている。

この川が、郷の命脈だ。

田畑を潤し、魚や硬玉などの糧をもたらし、郷の人々の生活を支えている。この川のおかげで、領主へ納める厳しい租税にも耐え、豊かとまではいかないが、穏やかな日々を守ることはできた。

今年の収穫はすでに終えている。

田畑は閑散と乾き、枯れた雑草を風に揺らしていた。

こちらには、働いている郷の者の姿も見えない。

リュウトは白い息を吐きながら、川沿いを歩いた。

しばらく歩いて、飛び石のついたところで、反対側の岸へと渡る。

その向こうは小さな丘だった。冬でも葉を落とさない背の高い木々が林立している。

リュウトは丘を上った。

凍えた土は硬かった。踏みしめるように、リュウトは歩く。しゃべる相手もないので、無言のまま、リュウトは息を吐きながら斜面を上った。小鳥が時折、頭の上の枝を渡っていく。

ほどなく、開けた場所に出た。大きな桜の木が一本、その中心にある。白い陽射しを浴びて、もうほとんど落ちた葉を、風に晒していた。

手の平を擦り合わせ、リュウトはその木に登る。

地面から離れ、高く、高く、もっと、高く。

手を伸ばし、頭上の枝を掴み、体を引き上げる。

枝が細くなり、もうこれ以上は上がれないところまで登りきると、リュウトは息をついて視線を遠くへ伸ばした。

空が広がる。

風が雲を引いていく、その道筋が見える。

リュウトは目を細めた。

先ほど見上げた雁の群が、さらに高く、小さな黒点となって森の向こうへ行くのを見た。

首を巡らし、リュウトの住む森へと目を向ける。

緑の茂ることのない森は、冬枯れの季節にも関わらず、他とすぐに区別がついた。

生き物の気配がしないのだ。

風さえも避けて通るかのように、沈黙している。

リュウトはしばらく見つめていた。

しだいに、ささくれ立っていた胸が落ち着いてくる。

美しい光景というよりは、淋しい景色であるのに、不思議と心が安らいだ。育った場所であるからかもしれないし、そこに美しい泉があることを知っているからかもしれない。母が言うように、そこがひどく静かだからかもしれない。余計な自身のざわめきも全て、吸い込まれていくようだった。

ほっとリュウトは息をつく。

しかし、その時、足元が揺れた。

「うわああーん」

同時に、大きな泣き声。

まるで小さな子どものような泣き方だ。

リュウトは驚いて、下を見る。頭の天が見えた。少女のようだ。黒い長い髪が震えていた。細い肩をしている。悲しいというよりも、何かに憤っているようだった。独りきりで泣いているその姿には、同情よりも驚愕が勝った。こんなふうに誰かが泣くのを見たのは初めてだ。とにもかくにも、降りづらい状況であることに違いない。

しかし、少女はなかなか泣き止まない。そんなに泣き叫んでは、喉が枯れてしまうのではないかとリュウトは思った。どこか他の場所で泣いてくれないものか、とヒトデナシなことも思う。しばらく彼女がここから去りそうもないと見てとって、リュウトは体勢を楽にしようと、別の枝に足を移した。

と。

ぱき、と軽い音がする。

「あ」

しまった、と気がついた時にはもう遅い。足元の枝は折れ、リュウトは落下していた。地面に激突することだけは避けようと、反射的に腕を伸ばしてすぐ手近の枝に捕まる。腕も足も頬も、容赦なく枝葉に叩かれて痛かったが、幸い、大事には至らなかった。

片腕で枝にぶら下がった形で、リュウトはほう、と息を吐く。

ぱらぱらと頭上から乾いた葉が降ってきた。

しかし、安心したのもつかの間、

「何、あなた」

リュウトはぎくっと顔を上げる。

すぐ傍に、少女の顔があった。頬は涙の跡で汚れ、目元は赤く潤んでいる。濡れた睫毛さえも間近に見えた。

彼女も、突然降ってきたリュウトに驚いたようだ。大きな瞳いっぱい目を見開いたリュウトの姿が映っている。

「……………」

息をのむ。

思わず、食い入るように見つめてしまった。

「血が出てる」

少女の唇が動く。

細い手がリュウトに伸びてきた。

リュウトは反射的に飛び退いて、地面に降り立つ。少女の触れようとしていた頬を、手の平でぐい、と拭った。かすり傷だった。少しひりひりするだけだ。

「何よ。変なの」

少女は鼻をすすって、手の平で頬を擦った。彼女が拭いたのは、涙の痕だ。

「変って、何だよ」

リュウトは警戒を解かずに、少女の様子を見守った。声がわずかに上擦って、舌打ちしたいのを我慢する。

「わたし、あなたのこと知ってるわ」

思い出した、というように少女が言った。

「よく、郷へ来ているでしょう？ あなた、目立っているもの」それから、少女はリュウトを上から下と眺めた。「何だ。普通の人間みたい」

変だと言ったかと思えば、普通だと言ったりする。

リュウトは少女の勝手な物言いに、少しむくれて、

「俺はおまえのこと、知らないよ」

と言った。

「わたし？ わたしは明里（あかり）というのよ。そこの郷の人間。ねえ、わたしも、あなたの名前、知らないわ」

「リュウトだ」

リュウトは短く応えた。

「リュウト。綺麗な名前ね」

明里は初めて微笑んだ。微笑むとやさしい女の子のように見える。

先ほどまで、大声を上げて泣いていた少女と同一人物とは思えない。いぶかしく思って、リュウトは尋ねた。

「明里は、さっき何であんなに泣いてたんだ？」

初めて彼女の名を口にする。

少しだけ、緊張した。

「誰もいないと思ってたのに」

明里は唇を尖らせて言う。

「……明里が後から来たんだ」

惘然としてリュウトは応えた。一度目よりも、緊張せずに彼女の名を呼べた。

それはそうね、と明里は笑う。

「何でもないわ。人には話したくないことよ」

一歩引いて軽く言った明里の瞳は、もう涙の影もなく、陽光だけを宿して輝いていた。

「そう」

「じゃあね、リュウト」

明里はもう一度リュウトの名を呼んで、去っていった。

一度も振り向かず、小走りに去っていく明里の背を、リュウトはしばし見送った。

冷たい風が、傷に沁みた。

明里は慣れた足取りで、危なげなく斜面を駆け下りていく。

頬を切る風の冷たさが、ほてった肌には心地よかった。

先ほど出逢った少年のことを思い返してみる。

最近になって、ふらりと郷に現れるようになった少年だ。『灰の森』から来たという噂があるが、信じられる類のものではない。生命の輪廻から見離されたような、緑の絶えたあの森に、人が住めるとは到底思えなかった。少年が郷の者とはまったく違う雰囲気をもたらすので、そのような噂も広まったのだろう。

普通の、男の子みたいだったわ、ともう一度明里は思う。

郷で、遠くから見かけることはこれまでもあった。髪の色が違うわけでも、異様な風体をしているわけでもないのに、彼は不思議と他人の目を惹いた。

子どもたちとは、すぐに打ち解けたようだった。見かけるときは、子どもたちと遊んでいるか、郷の様子を物珍しげに眺めているかのどちらかであることがほとんどだった。郷の大人たちが彼を遠巻きにして、話しかけることがなかったように、明里もまた、リュウトに話しかけようとは思わなかった。

それがどうしてなのかは、うまく言葉にならない。

ただ、一つ言えることは、明里は彼が怖かったのだと思う。

何が、と問われれば、明里自身も首を傾げざるを得ない。分からない。けれど、触れては何か神聖な禁忌を犯してしまいそうな、ひどく曖昧な畏怖を抱いていた。

しかし、顔を合わせて、言葉を交わしてみれば、何のことはない。

自身とさして背丈の変わらない、きちんと言葉の通じる人間だった。

「なあんだ」

川の岸まで下りてきてから、拍子抜けしたように呟く。

ちらりと振り返ったけれど、そこから彼の姿は見えるはずもなかった。

「明里！ どこへ行っていったの、探したじゃない」

郷へ戻るなり、明里は叱責で迎えられた。

腰に手を当てて、仁王立ちに立った女性が明里の前に立ちふさがっている。

「ごめんなさい、佳織（かおり）姉さま」

明里は反省している声で言い、肩をすくめた。

「もう。目を離すとすぐに何処かへ行ってしまっただなんて。小さな子どもじゃないのだからね」

佳織は手を腰に当てて怒ってみせたが、声には苦笑が含まれていた。

「心配しなくても、ちゃんと帰って来るわ。小さな子どもじゃないのだから」

「すぐそうして可愛くないことを言うのだから」

呆れたように息をついて、佳織は明里の額を小突く。

明里は額を押さえて、小さく笑った。

「おや、明里ちゃん、戻ってきたのかい？」

「いつまで経ってもお姉さんに迷惑をかけてちゃいけないよ？」

郷の者たちが、明里たち姉妹を見かけて、声をかけてくる。

「もう、みんなしていつまでも子ども扱い」

明里がむくれると、声をかけた郷人が笑った。

「まあ今のうちにたんど甘えときなよ。しかし、佳織ちゃんがいなくなってしまうと寂しくなるねえ」

「そんな。遠くへ行くわけじゃありませんし。今生の別れでもないんですから」

佳織は、郷で一番の器量良しと評判で、明里の自慢の姉だった。そして、一月後には家を出て嫁いでいくことが決まっている。

嫁ぎ先は、領主の次男の屋敷である。

運悪く、見初められてしまったのだ。

そう、とても、運の悪いことに。

「さて。準備をしなけりゃいけないことがたくさんあるんだから、明里もちゃんと手伝って頂戴ね。この冬は、もうわたしはいないんだから、あなたがしっかり父さまと母さまを手伝ってあげなくては駄目よ」

佳織が明里の背を叩いて言う。

「・・・・・・・・」

明里は頬を膨らませて答えない。

その様子に、佳織は目を細めて、やれやれ、と息をついた。

「いつまでもむくれているは、せっかくの可愛い顔もったいないわよ、明里。あなたは聡いから、ちゃあんと分かっているのでしょうか？」

明里はいっそう頬を膨らませて顔をゆがめる。

「じゃあ、信乃（しの）兄さまのお嫁さんには、わたしがなるから」

「あら。それは素敵だわ」

少しも動じずに、佳織はにこりと笑うのだった。

明里は頬に溜めていた息を吐き出して、肩を落とした。

信乃兄、可哀想に、と心の中で同情する。佳織が領主の次男坊などに見初められなければ、彼女は彼と一緒にいるはずだったのだ。

「風が冷たくなってきたねえ」

はあ、と佳織が手先に息を吹きかける。

「うん。今年は冬が来るのが早いみたい」

灰青の空を仰ぐ。

鳥が列をなして高くを飛んでいた。

雁だろうか。

「ほうら、ぼうっとしていないで、仕事仕事」

佳織が勢いよく明里の背を叩く。

「はい、お姉さま」

明里はおどけて言って、姉妹は笑い合いながら、日常へ戻っていった。

家に戻ると、母親の絹（きぬ）にも怒られた。

「まったくもう、お前って子はすぐに何処かへ行ってしまいうんだから。佳織みたいに、少しは落ち着いておくれよ」
明里はむくれたが、口答えするのは止しておくことにした。ここで口答えをしようものなら、日が暮れたってお説教は終わらなくなってしまう。

「洗濯。誰もあんたの代わりにやってないからね」

絹が目線で洗濯物の山を示した。彼女は草鞋や蓑を作るための藁を叩いている。こうして藁を柔らかくしておき、冬には家の中に籠もってそれを草鞋や蓑へと仕上げる。どこの家でも見られる冬の仕事だった。

しかし、洗濯には夏も冬もない。どんなに水が冷たいからといって休める仕事ではなかった。

「ええー。今から？」

明里は思わず不平を口にする。

「あなたが朝から何処かへ行ってしまって怠けたからでしょう？ 今時分のほうが、水も温くなっていて良いじゃないの」

「大して変わらないよ。もう、涙が出るほど冷たいんだから」

口を尖らせながらも、明里は洗濯物の盛られた籠を両手で取り上げた。

「あたしが代わりに行こうか？」

くすくすと笑いながら、佳織が言う。

しかし、明里が断わる前に、絹が口を出した。

「駄目よ、佳織はお嫁入りの前なんだからね。少しでも綺麗にしておかなくちゃ。あかぎれでも出来てしまったらあちら様に申し訳が立たないよ」

「あら。今さらそんなこと言っても、白魚の手にはならないけれど」

佳織は笑いを含みながら手を擦った。

「わたしも嫁入り前なんですけど」

明里が不服そうに訴えると、

「明里は良いのよ。心配しなくても、三太くんか寛次くんが貰ってくれると思うから。この間も三太くんとこの八重さんとその話をしていたね」

「はいはい、行ってきまーす」

話が長く、そしてまづい方向に進みそうだったので、明里は洗濯籠を抱えて、逃げるように家を出た。そんな話を勝手に進展されては敵わない。

「気をつけてね」

笑い混じりの佳織の声が背中にかけられた。

家を出ると、はあ、と思わず息をつく。

「そりゃあ、わたしだって、いつか誰かと一緒になるんだけど」

明里だって年頃だ。そう遠い未来のことではないだろう。

けれども今は、佳織のことだ。

洗濯籠を抱えて川に向かいながら、明里は思考を巡らせた。

どうすれば佳織は得体の知れない領主の次男なんかのお嫁に行かずに済むだろうか。それが当面の問題だ。明里はもろろとその難題の解決に頭を悩ませている。

領主の次男が佳織に興味を失くしてくれれば良い。

或いは、急病か何かでぼっくりいなくなってくれるとか。

それよりも、信乃が佳織を攫っていったはくれないだろうか。

先に信乃との間に子どもでも出来れば、破談になったりしないだろうか。

うーん、うーん、と考えるが、どれもあまり現実的ではない。

そうこう考える内に、川へ辿り着いた。

見かけられた郷の女に

「今から洗濯かい、明里ちゃん」

などと声をかけられる。

「はい」

と、明里は愛想よく笑って応えながら、さあて、と腕まくりをした。

洗濯板代わりに使っているいつもの岩の上に陣取り、衣服を一枚手に取ると、思い切って水に浸す。

「うう。やっぱり冷たい」

腕に鳥肌を立てながら、仕方なく明里は洗濯をした。黙々としていると余計に冷たさが身に染みる気がするので、えい、とか、やあ、とか、掛け声をかけながら、ごしごしと擦る。朝のいつもの時刻ならば、郷の女たちと話しながら出来るので気も紛れるというものだが、今は一人で何とかこの水の冷たさを誤魔化すしかない。

「ああ。今からこんなことじゃあ。これからもっと寒くなるっていうのに」

ぎゅっと衣服を絞りながら、明里はため息を洩らした。手はすでに真っ赤だ。今までは佳織と交代でしていた仕事だが、これからは明里がほとんど一人で引き受けることになるだろう。ますます佳織にはお嫁にあってほしくない。

「ああもう！ それもこれもあの次男坊のすつとこどっこのせいなんだから！」

明里は八つ当たり気味に叫んだ。明里の叫びは高い空にすつと吸い込まれ、明里も心もち胸をすつとさせた。わずかな満足に、口元に笑みを結ぶ。

「それはどこの次男坊のことなのかな？」

不意に、背後に馬の蹄の音を聞いて、びくっと明里は身を固めた。

いつの間に近づいていたのか。明里は洗濯に集中してまったく気がつかなかった。水面に馬上のその人の黒い影が揺れている。

無視をするわけにもいかず、明里は絞った洗濯物を胸に引き寄せてそろそろと振り返った。

人違いであればいい、という儚い期待は裏切られ、予想した人物がそこにいた。

毛並みの磨かれた馬に跨り、薄く笑みを浮かべて明里を見下ろしているのは件の次男坊、狭伊（さい）だった。従者を二人連れている。

「姉君は家にいるかな？ 明里どの」

中性的な声で、狭伊が言う。線の細い印象だった。切れ長の瞳に、尖った顎をしている。

「いません」

明里は不機嫌を隠さない声で応えた。

狭伊はそれで答えを得た、というように、唇を歪めて笑うと、「そうか」と短く言って明里に背を向けた。

明里はその背に子供じみて舌を出す。

「そういえば」

と、去りかけた狭伊が唐突に馬の足を止めたので、明里は慌てて舌を引っ込めた。

狭伊は振り返って、どこか面白がるような視線を明里に向けた。

「今朝方、私に佳織どなの代わりに嫁にしると、屋敷に訴えてきた娘がいたようだが」

狭伊はそこで言葉を切って、明里の反応を窺うようにした。

「そうですか。積極的な子もいたものですね」

明里は顔色を変えずに言えた自信がない。

「そう。気持ちはありがたいが、残念ながら私は佳織どなのように淑やかな女性が好みでね」

「姉さまだって、狭伊様が思っているらっしゃるほど淑やかじゃありませんよ」

「けれど、君が思っているより、私は佳織どのに惚れているのだよ」

鮮やかに笑う。

「……」

明里は、信じられるものか、と視線に言葉を込めた。

あからさまなその視線は、狭伊にも通じたものらしい。しかし、気を損ねた風もなく、目を細めただけだ。

「信じられないというのなら、それでも構わんさ。しかし、あまり愚かな行動は控えることだな。私は優しいが、限度というものがある。軽々しい行動は、君の大好きな姉君を悲しませることになるので、よく承知しておくことだ」

狭伊はそれだけ言うと、今度こそ背を向けて去っていった。

二人の従者が無言でそれに続く。

明里は唇を噛みしめて、それを見送った。

「何よ……っ」

すでに水気を切った衣服を、千切れんばかりに固く絞る。

顔が熱く火照っていた。

また泣き出しそうになり、手の甲で瞳を覆う。

それでも、その場にうずくまってしまった。

「分かってるわよ、そんなことっ」

悔しくて悔しくて、顔を上げられなかった。

高く高くを、雁の群が飛んでいく。

リュウトは柿の実を母に持って帰るのをすっかり忘れていた。

ほとんど無心に歩いていて、気がついたら泉の前にいた。

「お帰り、リュウト」

母の声にリュウトは、はっと顔を上げ、それと同時に柿の実の土産を忘れていたことを思い出したのだった。

「どうかしたのかえ？」

どこか放心しているようなリュウトの様子に、彼女が首を傾げる。

「うん。母さまにお土産を持って帰ろうと思ってたのに、忘れてきちゃったよ」

「まあ、そんなこと」

彼女の声にわずかに嬉しそうな響きが弾ける。

彼女は泉の上に立ち、陽光に透けるような姿でそこにいた。妙齢の女性のようにもあり、少女のようにもある。

「今度は、忘れないよ」

リュウトが言った。

「今度？ 行く必要などないよ。郷に一体、何があるというの？ お前を傷つけるもの以外ありはしないじゃないか。何処へも行く必要などないよ。我と一緒にずっとこの泉にいれば良い。ここにいれば、我はお前を守ってやれるし、理不尽に傷つくこともない。ねえ、よく考えや。この泉で我と静かに時を過ごすほうがどんなにお前にとって良いことか」

彼女は優しく言った。全てを見透かしているような眼差しだった。

けれどもその声は、リュウトには届いていないようだった。黙して、何かを考えている様子だった。

彼女はそんなわが子の顔を見下ろしながら、じっと言葉を待っていた。

やがて、リュウトが口を開く。

「変な子に、会ったよ」

「変？」

「泣いてたんだ。どうして、あんなに泣いていたんだらう」

独り言のように、リュウトは呟いた。

リュウトは俯いていた。だから、彼を見下ろす彼女が、不安げに瞳を揺らしたことには、欠片も気がつかなかった。

「人が、あんな風に泣くのを、初めて見た」

リュウトの落とした言葉は、泉に小さな波紋を描いた。

明るく日も、リュウトは丘の上の桜の木を訪れた。母は良い顔をしなかったが、それでも強引に引き止めたりはしなかった。

また落ちては敵わないので、今度は枝には上らずに、幹に背もたれて座っていることにする。

今日もまた冷える。

じっとしていると、足の先から熱を奪われていく。素足に草鞋という格好だったので尚更だ。

それでもリュウトはそこから動かずに、時々手に息を吹きかけては寒さをやり過ごした。

そうしてぼんやりと下から明里が上ってくるのを待っていたが、彼女はやって来なかった。

日が傾き始めた頃に、リュウトは立ち上がり、丘を下った。

冬の日短い。

暗くなる前に帰らなければ、母が心配するだろう。

丘を下りきると川辺に出る。

対岸には、夕餉の支度に、米を磨いだり野菜を洗ったりする女たちの姿がちらほらと窺えた。笑い声が聞こえる。ふざけて水をかけては、悲鳴を上げたりして、賑やかな様子だった。

対岸までは、おぼろげに相手の顔を判別できる距離だ。

リュウトは木の影に隠れるようにして、昨日覚えたばかりの顔を、その中に捜した。

娘たちは各々の仕事を終えて、一人、二人と去っていく。

その中に、明里はいないようだった。

リュウトが軽く息をついて、帰ろうと踵を返しかけた時、遅れて一人の少女が川辺に姿を見せた。彼女の姿を目にした瞬間、リュウトは何かを考える前に、飛び石を渡っていた。

途中で彼女が気がついて、顔を上げる。驚いた顔が、すぐに笑顔になった。リュウトは全ての飛び石を渡りきらずに、足を止めた。手を伸ばしても、届かない距離である。

「こんにちは。それとも、もうこんばんは、かしら」

明里が言った。彼女は芋を洗いに来たようだった。ほかの娘たちはすでに仕事を終えたのか、川には今、明里とリュウトの影だけが長く揺れている。

「……」

リュウトは何と応えてよいか分からず、黙って目を逸らした。咄嗟に近くに来たのは良いものの、何か用事があるわけでもない。ただ、そう、もう一度言葉を交わしたかったのだ。

「今日も冷えるわね。川の水って、どうしてこんなに冷たいのかしら」

明里は自分の仕事を再開する。

「冬だから」

リュウトは短くそう答えて、飛び石の上にしゃがみこむと、珍しそうに明里の仕事を見つめた。

明里はちらりと視線を向けたが、特に何も言わず、黙々と仕事を続けた。

水は本当に冷たそうだ。

みるみる明里の指先は赤くなる。

リュウトは泥を落として綺麗になる芋と明里の赤い指先をじっと見つめて、それから時々明里の顔を見た。彼女は俯き加減に自分の仕事に集中しており、特別リュウトのことを気にしている様子もない。

リュウトはまた芋と明里の指先に視線を落とした。

冷たい水仕事に時間をかける必要もない。明里は手早く全ての芋を洗い終わると、ざるを取り上げ、立ち上がると、慣れた手つきで水気を切った。

「じゃあね。夕餉の支度をしなくちゃ」

明里はざるを抱えて、そのまま立ち去ろうとする。

「あ」

リュウトは思わず手を川に伸ばし、明里に水をかけていた。

びしょ濡れになるほどではなかったが、冷たさは感じる量だ。

きゃっ、と思わず明里が高い声を上げる。

「何、するのよ」

明里は眉をしかめて、リュウトを睨んだ。

「えーと」

リュウトは目を瞬いた。自分で自分のしたことに驚いている。

明里はむっとしかめ面を作ると、足で川の水を跳ね上げた。飛沫はもちろんリュウトを目がけている。

「……冷たっ」

リュウトは大分容赦なく水をかけられて、声を上げた。

「仕返し」

い、と明里が口を引く。

「こんなにかけてない」

情けない声でリュウトが言うと、明里が笑った。

「ごめんごめん。風邪引いちゃわないうちに帰りなよ」

ひらりと身を翻して、今度こそ走って集落のほうへ去っていく。

リュウトはくしゃみをしてその背を見送りながら、彼女に笑ってほしくて、水をかけたのだと気がついた。

明里は駆けながら、一度だけ振り返った。

小さく佇むリュウトの姿が、まだそこにあった。

けれども立ち止まらずに明里は再び家への道を辿る。

帰りなよ、と言ったものの、彼は何処に帰るのだろう、ということが少し気になっていた。もしもずっと遠くから来ているのだとしたら。それよりも帰る家など持っていないのだとしたら。

少し悪いことをしたかも、と明里は思った。家に戻ったら何か拭くものでも持って行ってあげたほうが良いかもしれない。

しかし、明里の思考はそこで中断された。

目の前に、よく知った人物の背中を見つけたせいである。

「信乃兄さま！」

常より少し高い声で呼びかける。彼が振り向くと、ぱっと明里は笑顔になって駆け寄った。

「やあ、明里ちゃん」

信乃は駆け寄ってきた明里に笑みで応えた。

背の高い、がっしりとした印象の青年である。しかし、人の良さそうな笑みが威圧感を持たせない。

「薪を取りに行っていたの？」

明里は信乃が背負った薪の山を見て尋ねた。

「そう。まだまだいくらでも必要だからね。今年の冬はどうも一段と寒くなりそうだ。明里ちゃんは夕餉の手伝いかい？」

「もう水仕事は全部わたし任せなのよ」

明里は頬を膨らませてむくれてみせる。

「ああ。手が真っ赤だね」

信乃は苦笑するように言って、ざるを持つ明里の手を自分の手で包むようにした。

「あったかい」

「手が暖かいのは俺の特技だから」

「そんなのは特技って言わないわ」

明里はくすぐったそうに笑うと、一步、信乃から距離をとった。

信乃に暖められた手は、まだ少しぬくもっている。けれどそれよりも、胸の内が温まった。

「あのね、信乃兄さま」

明里が言いかけたとき、

「明里一。何してるの？」

佳織の声が背中からかけられた。

信乃が、明里の向こうに佳織の姿を見て、一瞬、悲しげに瞳を揺らすのを、明里は正面から見てしまった。

明里の後ろで、佳織も声を固めて立ち止まった気配がする。

「お姉さんが呼んでるよ」

優しい声で、信乃が言った。

「うん。またね、信乃兄」

明里は何とか笑顔を作ると、ぱっと信乃に背を向けた。数歩先に佳織が立ち尽くしている。

「姉さま」

明里が声をかけると、佳織ははっと我に返ったように微笑んだ。少しもぎこちなさのない笑みだった。きっと、お嫁にいった先でも、佳織は同じように微笑むことが出来るのだろう。

それが、明里にはひどく悲しく思えた。

幸せになってほしい人が、幸せになってくれない。そんなひどいことってない。そう、思う。

「もう。川に流されちゃったんじゃないかと思ったわ。あんまり遅いんだもの」

「ごめんなさい」

「母さまがまた怒っているわよ。早くおいで」

佳織が先に立って歩き出す。

「はい」

明里は返事をして、一度信乃を振り返った。彼はもう背を向けて、彼の家へと歩き出していた。広い背中が、今は小さく見える。

駆けて行って、叩いてやりたい衝動に駆られる。

「明里ー」

佳織に呼ばれた。

「今行く」

明里は信乃に背を向けて、しっかりと芋の籠を抱えて佳織の待つほうへ駆けた。

その日はもう、リュウトのことは思い出さなかった。

次の日リュウトは、丘へは上らずに、郷へと向かった。

「あ、リュウトだー」

「リュウトー、遊ぼう」

郷の入り口に立ったリュウトに気がついて、遊んでいた子供たちが駆けてくる。

五、六人の子供たちが、リュウトを取り囲んだ。

鼻の頭も頬も真っ赤だが、元気に外で遊んでいたものらしい。

「今日は仕事はいいの？」

リュウトが訊いた。

「今日は遊んでいい日なんだ」

「かくれんぼしようよ、リュウト」

「かけっこがいいなあ」

一緒に遊ぼうと子供たちはリュウトの手や服を引っ張ってせがむ。

リュウトは笑った。

この間は切ない思いをしたので、こうして屈託なく接してくれることが素直に嬉しい。

「いいよ。何をやる？」

かくれんぼをすることになった。

子供の一人が鬼になり、他の子供と一緒にリュウトも隠れる場所を探して郷の中を駆ける。

幾人かの冷たい視線は、今は気にかけないことにした。

それよりも十の間に、上手い隠れ場所を見つけることが重要だ。

数を数える子供の声がかすかに聞こえる。

リュウトは手近な木に登ることにした。身を隠す葉は全て落ちてしまっているが、目線よりも上の場所は死角になりやすい。手ごろな難易度だろう。

十を数えおえた子供が足元を走って去っていく。リュウトには気づかなかった。小さな笑いを堪えて、リュウトは枝の上で少しくつろぐ。

それほど高い木ではなかったが、郷の家の屋根屋根が見渡せた。藁葺きの屋根が、眼下に広がる。生活をする人々の頭が見える。無心に薪を割る者、おしゃべりを楽しんでいる者、どこかへ歩いて行く者、行商姿の者……。多くの人間が、ここでは生きている。

生活の匂いがし、音がする。

それは心地よく、懐かしい感じがした。

泉の水の匂いや、森を渡る風の音と共に育ってきた。

それなのに、どうして人々の暮らす光景に、懐かしさを感じるのだろうか。

理由は分からなかったが、感じたことは揺るぎようもなく、確かなものだった。どんなに冷たくされても、陰口を叩かれても、こうして、人々の暮らす間にいることに、確かな安堵を覚える。その気持ちをまだ、彼は母に話したことはなかった。

「リュウト？」

名前を呼ばれて、はっと下を見下ろした。

かくれんぼの途中だったのだ。もう見つかってしまったかと思ったら、そうではない。

こちらを見上げていたのは明里だ。

「そんなところにいて、また落っこちても知らないわよ」

彼女は笑って言った。

「落ちないよ」リュウトは慫慂として顔をしかめてから、思いついたように言った。「上っておいでよ。遠くまで良く見えるよ」

明里は意外なことを言われた、というように目を開き、それから迷うように、きょろきょろと左右を見回した。

「上らないわよ。怒られちゃうもの」

「どうして？」

分からずに、リュウトが首を傾げた。

「女の子だもの。そんなお転婆なことはしないものなの」

明里は両手を腰に当てて、当たり前のように言ったが、リュウトには余計に分からなかった。

「女は木に上らないの？ そうしたら、明里は木の上からの景色は見られないってこと？」

心底不思議そうに言う。

「だって、危ないわ」

「そんなに高い木じゃないし、平気だよ。落ちないように、捕まえてあげる」

リュウトは明里に手を伸ばして言った。

明里は言葉に詰まる。

リュウトの言うことも、最もなこと思えてきた。

明里だって、木の上からの景色を見たい。それならどうしてすぐにも顔いて、木に上らないのか。

母親に知られたら、怒られるに決まっている。

けれども、明里が母に怒られることなどいつものことだ。

郷の女の子は、誰もそんなことはしないだろう。

だからといって、明里もそれをしてはならないという理由にはならない。

女の子は、例えば佳織のように、淑やかに大人しくあるのが理想だ。

それはでも、誰が明里に期待していることだろう。

考えれば、リュウトの手を断わる理由がことごとく消えてしまった。

「ねえ、おいでよ」

無邪気なリュウトの誘いに乗る方が、断然素敵なことだと思えた。

「よし。上ってみようか」

思い切って言うと、自分でも意外なほど胸が弾んだ。

リュウトが破顔するのを見た。

こんなに嬉しそうに笑顔を、そういえば、久しぶりに見たな、と明里は思った。自分はどうかだろう。

明里が手を伸ばしたとき、

「リュウト、見つけたー」

子供たちに大きな声をかけられて、リュウトはずるっと手を滑らせた。

危ないところで落下は避ける。

「驚かすなよ」

大きく息をついて、リュウトが言うと、子供たちは可笑しそうに笑った。

「じゃあ次はリュウトが鬼！」

一人が言うと、歓声を上げて、子供たちは散っていく。

「ええー、それって間違っていない？」

リュウトは抗議の声を上げたが、すでに子供たちは新たな隠れ場所を見つけるために、去った後だった。楽しげな笑い声だけが、風に残る。

ちえ、とリュウトは口を尖らすと、くすくすと明里が笑った。

「遊ばれてる」

「てないよっ」

むっとした顔をリュウトは向けたが、明里の笑い顔につられて、怒った顔は保てなかった。

「風邪、引かなかった？」

「風邪？」

「うん。昨日は水、思い切りかけちゃったでしょう？」

「ああ」

リュウトは顔いてから、思い出したのか苦い顔をした。

「母さまに心配されたけど。川にでも落ちたのかって」

「それは悪いことをしたわ」

明里はすまなそうに言った。

「平気。母さまは心配しすぎるんだ」

リュウトは明るく笑って言った。

明里はほっとしながらも、ふと以前から気になっていたことを訊いてみることにした。

「ねえ、リュウトはどこから来ているの？ この近くの郷から？」

「あっちの森から」

リュウトは大雑把に指をさした。

「森って」

明里はリュウトの指の先を見やって、眉をひそめる。

「知らない？ 泉のある森なんだけど。やっぱり、ここの郷の人間は来ちゃいけないと言われてるの？」

「まさか、本当に灰の森から」

明里は小さく息を呑む。

「この郷の人はそう呼ぶね」

リュウトは何でもないことのように頷いた。

「……実は、隠れ里があるとか？」

「？ 泉に住んでるのは、俺と母さまだけだけど」

「そう」

明里はまだ納得しかねる、という表情だった。

「綺麗な泉だよ。郷の人ももっと遊びに来たらいいのに」

ああ、でも、そんなことをしたら母さまは嫌な顔をするかも、とリュウトは悩み顔になった。

「本当に、あそこに住んでいるの？」

「だから、そうだって言ってるじゃないか」

「だって」

人が住める場所とは思えない、という言葉で明里はかるうじて飲み込んだ。

「そんなに言うなら、来てみればいい。そうだ、それがいいよ」

リュウトは言ってから、その思いつきに目を輝かせた。

「え、でも」

「行こうよ。走ったらすぐだよ」

リュウトが手を伸べる。

けれども、木に上るのはわけが違う。

明里は迷った。

灰の森へは足を踏み入れたことこそないが、幼い頃から、あそこは神さまが眠っている場所だから行ってはいけないのだ、と言われていた。それに、怖くもある。それは、遠くからリュウトを見ていた時に感じたものと同質の怖さだった。

明里は静かに首を振る。

「行けないわ」

リュウトは不服そうな顔をした。

「なぜ？」

「だって、あなた、かくれんぼの途中でしょう？」

明里は笑って逃げる。

「そんなの……」

「隠れているのに、見つけてもらえなかったら寂しいわ」

明里は一方的にそう言うと、それじゃあね、とリュウトを置いて立ち去った。

向けた背に、リュウトが一から数を数える声が当たった。

ほんの少しより、わずかに多分に、明里は後悔の気持ちを抱いていた。

「でも、ねえ」

明里は灰色の空を仰いで、白い息を吐き出す。

吹き飛ばすには厚すぎる雲の層が、雪の気配を思わせた。

今年はまだ、雪は降っていない。

乾いた風が吹きぬける。

寒さに明里は肩をすくめ、小さく咳を洩らした。

行き交う郷の人間にも、咳をする人が増えている。

リュウトに言ったものの、自身が風邪に気をつけなければならないかもしれない。

早く帰って火にあたろう、と明里は家路を急いだ。

数日が過ぎた。

リュウトは郷へ来るたびに、明里の姿を探すようになっていた。

運良く会えるときもあれば、一日中うろうろしていても会えない日もある。

会ってしばらく話をするときもあれば、目顔で挨拶をするだけのときもあった。

「それでさ、明里には姉さまがいるんだって。すっごい美人で、何でも出来て、優しいんだって自慢してた。ねえ母さま、俺も兄弟が欲しいよ」

昼近くに郷へ出かけ、夕方日が沈むころに、リュウトは泉に帰って来ると、今日の出来事を泉の母親に報告する。

「……最近はおまえ、その娘の話ばかりじゃの」

少しく呆れたように、彼女は言った。

泉の面に立ち、腕を組んでリュウトを見下ろしている。

月明かりに透けるように、彼女の輪郭はかすかな光に滲んでいた。

雲は多いが、月の光は強く、正円に近い形で、周囲の雲を払っていた。

乾いた森は闇に沈み、泉だけが輝くように白く息づいている。

「そうかな。そうかも。だって、明里に会いに郷に行っているから」

屈託もなくリュウトは笑みを見せて言った。

彼女は眉をひそめる。

「良くない兆しが出ているよ。悪いことは言わぬから、もうその娘に近づくのは止めておおき。良い子だから、我がの事は聞いておくものだよ」

言い聞かせるように、彼女は言った。

しかし、リュウトはきょとんと目を瞬く。

「なぜ？ 俺は明里と会うの、楽しいよ。母さまもきっと好きになる。でも、泉においでって言ってもなかなか来てくれないんだ」

「そうだろう。賢い子なら、そうするだろうね。ねえ、我は本気で忠告をしているのだからね。お前にとっても、その娘にとっても、重要なことだ。もう会うのはおよし。郷へ行くのもよしたほうが良い」

「そんなことを言われても、分からないよ」

リュウトは口を尖らせる。

「今は分からなくとも、いずれ我がの正しかったことが分かるさ。だから今は、大人しく言うことを聞いておくれ」

重ねて彼女が言った。

「だから森から出るなって言うの？ ねえ母さま、正直に言ったら、郷に行っても楽しいことばかりじゃない。嫌なこともある。嫌な人もいるよ。けど、」

と、リュウトは地面に仰向けに寝そべって、夜の空を仰いだ。

土は冷たい。

けれども水の匂いを含んで、固くはなかった。泉の周囲には、わずかに草も生えている。

月がリュウトを見ていた。

リュウトは明るく笑みを返す。

「けど、嬉しいこともあるよ。俺、何があったって平気だよ。明里が笑ってくれるなら」

月明かりに手をかざして遊ぶリュウトは、母親の顔が悲しく歪むのを見なかった。

「そうかえ。お前がそこまで言うのなら、我ももう何も言うまいよ」

声だけが優しく、リュウトの上に降る。

「ありがとう、母さま。今度きっと明里に会わせてあげるから」

「そう」

眩くように彼女は言って、月を見上げた。

耳を澄ますように、じっと瞳を閉じる。

風の音だけが、彼女の髪を揺らして過ぎた。

明里は採集に行った男衆たちから分けてもらった茸や木の実のどっさり入った籠を抱えて、のんびりと家路を辿っていた。

空は不思議な紫色をしていた。

昼間と夜の狭間。

太陽の彩りは、秋よりも早く夜に吸い込まれる。

一番星を探しながら、明里は耳を澄ましていた。

一人で、あるいは誰かと一緒の時でも、外を歩くときに耳を澄ます習慣がついてしまっていた。リュウトのせいである。最近、頻繁に会いに来るので、つい、今日は来ているのか、と走ってくる足音に、名を呼ぶ声に、耳を澄ましてしまう。

子供たちが遊んでいるのを見かければ、その中に彼の姿がないかと探す。

洗濯や、米とぎに川へ行けば、向こう岸から彼が渡って来ないかと、対岸に目を凝らす。

そして、そんな自分にふと気がついて、何をしているのかしら、とごまかすように笑うのだった。

慕われているのは分かっていた。

でもそれは、子供たちがリュウトを慕うような、明里が佳織を慕うような、そういう感情と同質のものだということを知っていた。

それ以上でもそれ以下でもない。

では自分はどうかと問い返してみても、やはり答えは同じだった。

年齢を訊いたことはないけれど、可愛い弟が出来たような気持ちでいる。

それ以上でもそれ以下でもない。

けれども、それ以外では、あるかもしれない。

とりとめのない物思いは、

「明里」

と、呼ぶ声に断ち切られた。

明里は振り返って、期待外の人物に、眉を寄せた。

「何だ。嫌そうな顔をして」

にやにやと笑いながら明里に近づいてきたのは、明里より少し年上らしい青年だった。中肉中背の、髪に癖のある青年である。

「三太（さんた）。何か用なの？」

明里は陰のある声で言った。

「すげなくするもんじゃないぜ。ちょっとは佳織さんみたいに、優しい声も出せないもんかな。そんなんじゃ嫁の貰い手がなくなっちゃうってもんだ」

頬に笑みを浮かべたまま、三太は明里に寄ってきた。

「余計なお世話よ。あんたには関係ないわ」

明里は三太を思い切り睨みつけてやると、くるりと背を向けて、早足で歩き出した。

「関係ないってこたあないだろうよ。まあ待って」

三太はすぐに追いついて、明里の肩に手を置く。

「触らないでよ」

明里は立ち止まって、三太の手を跳ね除けた。

三太は両手を上げて、おお怖、と笑う。

「ま、俺はお前がどれだけじゃじゃ馬でも、女らしくなくても許してやるけどな。多少の浮気だって、いちいち目くじら立てたりしないぜ？」

「何よそれ」

引っかかる物言いに、明里は眉をひそめた。

「郷の者ならもう知らない奴はいないぜ。明里が狐の子にかどわかされてるって」

口に笑みを浮かべたまま、三太は目を細めた。

「狐の子って……。もしかして、リュウトのこと？」

ひゅう、と三太が口笛を吹く。

「竜、だなんて、ご立派な名前だな。まさか灰の森の神だって言うんじゃないだろうな？」

喉の奥で三太が笑った。

「勝手に言っていれば？」

明里は相手をする気にもならず、息を吐くと、背を向けて歩き出した。

「おい、明里」

三太が少し気を損ねた声をかけるが、構わない。

郷の者たちが、リュウトのことをあまり快く思っていないことは知っていた。明里とて、こうしてリュウトと言葉を交わすようになるまで彼のことを怖がっていたのだ。郷人たちを責めることはできない。

得体の知れない者、正体の知れない者を郷の者は怖れる。

行商でもない。旅人とも違う。時々郷を訪れる芸人でもない。

さらに加えて、禁忌の森である灰の森から来ているという。

見た目こそ郷の若者と変わったところは見当たらないが、それだけで充分異端の存在と言って良かった。

それでも今はまだ、敬遠はされても、表立って厳しく排他されているわけではない。子供たちとも仲良く遊んでいる

。

けれども三太の言うように、少しずつ、少しずつ、不穏な影が表に浮いてくるようになってきていた。

リュウトと話している時に、それを感じるようになった。冷たい視線、言葉にならないひそひそとした囁き声。それは、気にしなければ気にならない程度のものだったが。

このままリュウトの存在に郷が慣れてくれればよいけれど、と明里は思った。ちっとも悪い人間ではないのだ。それが早く皆にも伝わってくれば良い。

「あ」
明里は前方に信乃の姿を見つけて駆け寄った。
信乃のほうも明里に気づいて笑みを向ける。

「信乃兄さま」
「やあ、明里ちゃん。ふたり揃って散歩かな？」
「ふたり？」
いぶかしく思っ明里が振り向けば、とうに去ったと思っていた三太が後ろから付いて来ていた。
「何で付いて来ているのよ」
明里が無然とした顔を向けると、三太もさすがにむっとする。
「お前な、無視するにもほどがあるだろう」
「知らないわよ、そんなの。何なのよ、さっきから絡んで。用事があるならさっさと言えば？」
「用事だったって、別に」
三太はもごもごと口ごもる。
「まあまあ、明里ちゃんもあまり手厳しくするもんじゃないよ。三太は明里ちゃんと話したかっただけなんだろう？」
取り成すように笑って信乃が言った。
「だって信乃兄さま」
「そうだぞ、明里。少しは優しくしてみろ」
味方を得て、三太が強気になって言う。
「三太。お前も少しは素直になれ」
こつ、と手の甲で三太の頭を叩いて信乃が言った。
「そうよ。あんたももっと信乃兄さまみたいな度量の大きな男になってみなさいよ」
今度は明里が勢いを得て、勝ち誇ったように言う。
信乃は笑って肩をすくめた。

「やれやれ。これではお互い様だな」
ええ一、と声を揃えて不服な顔をする二人を見て、信乃はまた可笑しそうに笑った。
その穏やかな会話の中に、無遠慮な蹄の音が割り込む。

「これは、明里どの。こんにちは」
降ってきた声に、明里の顔は凍りついたように固まった。

「あ、狭伊さま」
はっとしたように三太が言い、笑っていた信乃の顔も硬直する。
明里は嫌々ながらも無視をするわけにもゆかず、顔を上げた。そして、はっと息を呑む。

「……姉さま」
栗毛の馬上、狭伊の後ろに見慣れた姉の姿を見つけて、明里は我が目を疑う。
隣りの信乃の、息を呑む音も聞こえた。
佳織はそっと顔を伏せる。顔を伏せる前に、唇を噛むのが見えた。

「少しの間、姉上をお借りするよ」
見下ろして、涼やかな声で狭伊が言う。
明里は、狭伊の腰に回された、佳織の腕を見ていた。

「おい、明里。返事をしろよ、失礼だぞ」
横から三太につつかれる。

「……………駄目です」
明里は言った。喉を掻くような声だった。
おい、と三太が慌てるが、明里は一つ息を飲んで、顔を上げる。真っ直ぐに、狭伊ではなく、佳織を見た。
「これから晩の支度もあるし、忙しいんです。姉さまを連れて行かれては困ります」

先よりはしっかりとした声が出た。

「義父殿にも義母殿にも了承を得ている。何、少しの間だ。遠乗りをするには風が冷たい」

狭伊が肩をすくめて言った。

「けどっ」

明里が言いかけるのを、佳織が制す。

「ごめんね、明里。お願いよ」

聞き分けて、と瞳が言っていた。

明里は唇を噛んで俯く。その肩に信乃の手が置かれた。その視線が狭伊を向くのが分かる。

「申し訳ありません。お引止めをして」

淡々としたその声に、明里は胸のつぶれる思いだった。

「なに、構わぬさ。では明里どの。失礼するよ」

明里、と三太に小突かれたが、顔も上げられなかった。

蹄の去る音を、拳を握りしめて聞く。

遠く聞こえなくなっても、まだ耳の奥で響くようだった。

「明里、何だよ今の態度は。いくら佳織姉がお嫁にいつまうのが気に入らないからって、あんまり子供っぽいだらう」

三太が腰に手を当てて言った。

「そうだよ、明里ちゃん。今みたいな態度は良くないよ」

信乃が明里の肩を、宥めるように叩く。

「どうして？」

明里が顔を上げる。泣いてはいなかった。

ずっと、問いたかったことだ。

「どうして、納得しなくちゃいけないの。わたし、嫌だわ。佳織姉さまには、幸せになってもらわなくちゃ絶対嫌よ。信乃兄さま、姉さまを攫ってよ。姉さまだってきっと、」

唇が震えた。

「明里」

強い口調で名前を呼ばれ、びくっと明里は口を噤んだ。

優しい瞳で、目線をそろえて見つめられる。

「お前の気持ちは嬉しいよ。それは、佳織も同じだと思う。でもね、これで良いんだ。佳織は狭伊様の屋敷へお嫁に行く。俺も、佳織も、充分納得しているよ。これで良いんだ」

ゆっくりと、含むような口調だった。

明里は首を振る。

幼子のような、と何処かで思った。

「わたしは納得できない。どうして？ どうして、佳織姉さまも信乃兄さまも納得してしまうの？ そんなの間違っている。優しいから、佳織姉さまも信乃兄さまも 我慢しなくちゃいけないの？ 無理矢理納得しなくちゃいけないの？ おかしいよ、そんなの。譲らないでよ。絶対、大事なことなのに、一人で納得して、譲らないで」

「明里ちゃん……」

信乃が少し辛そうな顔になる。

「明里、子供のわがままみたいなこと、いつまでも言っているなよ。分からないほど、お前だって馬鹿じゃあないだらう？」

三太が言った。

「あんたは黙っててよ！」

明里は思わず声を荒げる。

言ってしまうから、恥ずかしさに顔を赤くした。

分かっている。

明里とて、言いたくない。

正しいことを言いたいわけじゃない。そうして追い詰めて、信乃や佳織に、辛い顔をさせたいわけではない。でも、それ以外に、どうしたらよいのかわからない。

嫌だと駄々をこねても駄目。

綺麗ごとと言われる理屈を並べても駄目。

どれだけ言葉を尽くして説得しようとしても駄目。

それはもう、決めてしまっているからだ。佳織も、信乃も決めてしまっているのだ。

それを明里が、どんなに近しい間柄であるといえども、簡単に覆せるはずもない。

分かっている。

けれども、納得できない。

もはや意地でもあるかもしれない。

「明里？」

声が届いたのは、その時だった。

信乃と三太が、あ、と息を呑む気配。

ぼんやりとした頭で、明里は顔を上げる。

「泣いているの？」

泣いてなんかいないわよ、と明里は言ったつもりだった。

けれども声にはならず、ただ首を振る。

ああ、嫌だ。

信乃兄さまの前で、こんなみっともないこと。

だから、手を引かれた時に、明里は逆らわなかった。

明里、と名前を呼んだのは、三太か信乃か分からない。

とにかく、ここを離れたくて。

泣き出す前に、離れたくて。

引いてくれる手に、縋るように。震えて、握り返した。

歩いて、歩いていた。

日は急速に傾いて、地平は濃く鮮やかに燃えている。

葉の落ちた木の影もまた濃く、黒々と地に落ちていた。

風はないが、空気は澄んで冷たい。

鼻の頭も、頬も、冷たかった。

ただ、引いた明里の手だけが熱をもって熱い。

二人は無言だった。

枯葉を踏む足音だけが、等間隔に耳朶に響く。

時々、明里が大きく息を吸って吐くのが分かった。

その際の震えが、つないだ手を通して伝わる。

リュウトの心臓まで、ひりひりと震えるようだった。

その度に、呼気が震える。

泉まで、もういくらもなかった。

まばらであった木々は、不揃いな檻のように立ち並ぶ。その枝には一片の青さもなく、景色は寒々と、乾いていた。

と、明里の足が止まる。

リュウトは振り返った。

「わたし、帰らなくちゃ」

それは言わなければならない台詞を繰り返しているようだった。

瞳は彼女自身の爪先を見つめている。

「なぜ？」

静かな声で、リュウトが問うた。

「だって、母さまや、父さまが心配するわ」

明里はリュウトを見上げた。口だけが、何かに操られているように、淡々と言葉を継ぐ。

「日も暮れてしまったし……」

「夜道は危ないよ」

リュウトは半身を泉へ向けた。つないだ明里の手を、少し引くようにする。

「でも、行けないわ。わたし、これ以上は……」

明里が、半歩下がった。

「なぜ？」

顔だけ振り返って、リュウトが問うた。

瞳に、月の光が映る。

空は紅から藍色に変わり、空気は水の香に浸る。

リュウトの影は地に広がる樹の影と重なり、広がる枝がたてがみのように、風にざわめいた。

「リュウト……」

確かめるように、明里は少年の名を呼んだ。

リュウトは、わずかに表情を緩める。

「おいでよ、明里」

手を引いた。

ためらいがちな、抵抗がある。

「行こう？」

リュウトの声は、静かだった。

強制はしていない。

けれども、満月のような引力で。

静かに、静かに、惹き付けられる。

引いた足を、明里は戻した。

リュウトは明里に背を向けて歩き出す。

手を引かれながら、明里も歩き出した。

一歩、二歩…。

見上げた夜に、月は怖ろしいほどの白さで。

明里はリュウトの手を握る。

その手に、体温があることを確かめるように。

リュウトの手が、力強く握り返す。

二人、離れてしまわないように。

黒々と林立する木々の中、二人の姿は白く、月明かりに浮いている。

夜は静けさを増し、二人以外に、息づくものの気配もしない。

足音を立てることさえも忍ばれる、静寂。

体の内からの震えが、肌を粟立たせる。

このまま、ずっと、何処へもたどり着かず、歩いていけたら。

そう、思ったのは、リュウトか、明里か。

そして、唐突に視界が開け、とうとう泉にたどり着く。

明里は目を見開いた。

瞬間、息を止める。

夜を歩いて、月にまで来てしまったのかと、思った。

空気は静寂に澄み、光は温度もなくほの白い。

目の前には泉がある。

胸を震わせながら、明里は止めて苦しくなった息をそろそろと吐き出した。

自分の吐く息で、泉の水面を揺らしてしまいそうな気がする。

それほどに怖ろしく、この場での自身の異質を強く感じた。

神域、という言葉思い出す。

明里が立ち尽くし、身を動かさずにいると、風もないのに、泉の水面が揺れた。

中央に、雫を落とされたように、等しい円が幾重にも広がっていく。

「母さま、ただいま」

リュウトの声に、明里ははっと瞬きを思い出した。

円弧の中央から、すい、と背の高い女性が姿を現す。

長い髪。

細くやわらかな輪郭。

ゆったりとした白い衣。

その裾から覗くつま先は裸足で、わずかに水面から浮いていた。

身体は月の光を纏うように、神々しく、どこか朧であった。

ゆっくりと長い睫毛で縁取られた瞼を開く。

かすかに開いた唇から、水を渡るような声が響いた。

「おかえり、リュウト」

やわらかな視線はリュウトに向けられ、ついで、明里に注がれた。

明里は身体の内まで見透かされたような視線に、肩を強張らせる。

泉の女性は、唇に笑みを浮かべた。

「よう来やったの、可愛い娘。リュウトからそちの話は聞いているよ」

「え、あの」

呼吸の仕方を忘れたみたいに、明里は言葉を泳がせる。

「明里だよ、母さま。明里、俺の母さまだよ」

リュウトがふたりの間に立って紹介した。里にいる時と変わらぬ気安い態度に、明里はようやく肺まで空気を吸い込めた。心音はまだ高く、足元は宙を踏むように危うかったが、視線はまっすぐにリュウトの母たる女性に向かう。

「はじめまして、明里と申します」

「そう」

彼女は静かに微笑みを浮かべると、

「もっと近くへお寄りよ。我に顔をよく見せてごらん」

優美な指先で明里を手招いた。

「は、はい」

逆らえずに、明里は泉へと歩を踏み出す。

と、リュウトとまだ手をつないだままだったことに気がついて、慌てて振りほどいた。

「あ」

リュウトも今更気がついたのか、多少きまり悪げに笑ったような困ったような表情で唇を曲げる。

泉の彼女はただ、優しげに微笑んでいた。

おそろおそろ、明里は泉に近づく。

「ああ」

彼女が手を伸ばす。

明里は立ち止まって、肩を縮めた。

彼女の指先が伸びる。触れず、明里の頬の輪郭を辿った。

「良い子だね。可愛い子。ねえ、我は機嫌が良いの。特別に、お前の願いを叶えてやっても良いのだえ？」

「え？」

瞬く明里に、彼女は笑みを深くした。

「何ゆえ、結ばれない恋を、人間はするのだろうか。貝が綺麗に合わさるように、向けた想いもまた、相手の想いと必ずびたりと重なれば良い。そうは思わぬかえ？」

「はい」

分からないままに、明里は小さく頷いた。

満足そうに、彼女が目を細める。

「そうだろう？ 己と結ばれる、唯一の人だけを恋えば良い。絵合わせのように、外れなく、皆が皆、びたりと己のつがいのみを見出せたら良い。のう？ さすれば、お前のように、苦しい想いをして泣く娘もいなくなる」

「……」

明里は俯いた。

頭上から、美しい、彼女の声が降ってくる。

「誰も悲しまず、全てが上手くいくように、我が手伝うてやろう。簡単なこと。男の心がそなたに向くように。そなたの姉が恋われた男を好くように、すこうし、手を添えてやればよい」

「え……」

明里は、何を言われたのか分からない、という顔をした。

「さすれば皆が、幸せになろう？」

絶世の笑みを、彼女は浮かべる。

「それは」

かすかに、明里は首を振った。

けれども言葉が出てこない。

一瞬、描いた、幸福な光景に胸が詰まった。

「賢い子だもの。わかるだろう？」

反論の言葉がぐるぐると頭の中を巡った。

人の気持ちを捻じ曲げるなんて。

わたしを好きになってももらいたいわけじゃない。

好き同士なのは、姉さまと彼で。

二人に、幸せになってほしくて。

二人で、幸せになってほしくて。

「そなたは賢い子だけれど、少し身勝手よの。まだ子供、とも言えるか」

子供、という単語に、明里は少々むっとした顔を見せた。くす、と彼女が笑みを洩らす。

「そなたの望みは、美しいのかもしれない。けれどね、一度でも考えたことがあるか？ そちの姉も、そなたと同じことを望んだかもしれぬことを？」

「あ……」

「人の幸せを望むことを、己が幸せとする。その心持ちは嫌いではないよ。けれども我は、他人の幸せのために、己を粗末にする者は嫌いだえ。己が幸せになることで、己が幸を望む者を幸せにできるということ、そちは考えたことがあるか？」

いくつかの顔が、明里の脳裏に思い浮かんだ。

彼女の言うことは、とてもよく分かる。耳朶まで熱を帯びるのを感じた。

「身勝手ということは、承知しています」

上擦る声で明里は言った。

「いや、分かっていないよ、お前は。ねえ、可愛い子や。それならば、そちは何を望んでいるというの？」

「わたし、は、」

彼らに幸せになってほしい。

でも、そんな道がどこに？

たとえば彼が姉を攫ってくれたとしても、それでどうして幸せになれる？

たとえば姉が婚姻を拒んでも、簡単に諦めてもらえるものでもない。

でも、そう、たとえば、

「狭伊さまが、いなくなれば……」

自分の口にした言葉に、明里は思わずぞっとした。慌てて口元を押さえるが、出た言葉は戻らない。

「狭伊って誰？」

ずっと黙っていたリュウトが口を挟んだ。はっとして、明里は振り返る。

リュウトの姿は森の影に沈み、瞳だけが、月を宿したかのように光を反射していた。

「姉さまが、嫁ぎに行く人」

誘引されたように、唇が答えを紡ぐ。

「そう」

繁みが鳴って、リュウトが前に出る。明里は思わず身を固め、月明かりの下、晒されたリュウトの姿がきちんと人の形をしていたことにほっとして肩の力を解いた。

「夜も更けた。迎えがきているようだよ、可愛い子や」

視線を遠くへ向けて、彼女が呟いた。

「あ」

明里は目を見開き、それから青ざめた。

「いいじゃないか、ここにいれば。明里を泣かせた奴らのとこになんか、帰る必要ないよ」

リュウトがふてくされて言う。

いつもの彼の雰囲気、明里は安心して、小さく笑った。

「帰らなければ駄目よ。母さまも、姉さまも、きっと心配しているわ」

「それなら、その二人もここへ連れてくればいい」

「我は嫌だよ、そのようなことは」

「母さまっ」

不満げにリュウトが泉に立つ彼女を仰ぐ。

「あまり、その子を困らせてやるな、リュウト。嫌われてしまうぞ？」

「だって……」

「ふふふ、お前は本当に我儘に育って」

嬉しそうに、彼女は目を細めた。

何が嬉しいのかしら、と明里は思った。我儘は宥められて育った明里だ。彼女がリュウトを叱らずに、目を細める意味がよく分からない。

「さあて」

彼女は視線を明里へと下ろした。

反射的に頬が強張るのを明里は感じる。

彼女は口の端も上げずに笑ったようだった。長い髪が揺れて、月の光が明里の眼前に零れた。

「戯れは終いだ。お帰り、可愛い子や。そなたはそなたの帰るべき場所へ。そして、この先何が起ころうと、もう二度と、こちら側へ足を踏み入れようとせぬことだ」

「それは、どういう」

意味、と問おうとしたところを、彼女が言葉を重ねた。

「次に踏み入れれば、もう二度と、そちら側へは戻れなくなるよ」

その覚悟がお前にあるかい？ 言葉にはせず、彼女の瞳がそう問うていた。

明里が去ってからというもの、リュウトは無邪気な笑みを見せなくなった。

落ち込んでいるというよりは、何かを考え込んでいるふうで、顔立ちに少し幼さが失われたようにも見える。

変わらずに、郷へは足を運んでいた。しかし、明里の姿を見かけると、隠れて見つからないように物陰に身を寄せるようになっていた。

「リュウトー、遊ぼうよ。何してるの？ かくれんぼ？」

子供たちが纏わりついてくると、しいっとリュウトは人差し指を立てる。

明里がリュウトに気づかずに通り過ぎたのを見届けると、ふうっと息を吐き出して、不思議そうな顔をする子供たちに向き合った。

「なあ、お前ら、狭伊って誰か知ってるか？」

「狭伊さまのこと？ 知ってるよ。りょうしゅさまのこの、えらい人だよ」

「そうそう、馬に乗ってくるんだよ。ぱかぱかって」

「あとね、佳織姉さまのだんな様になる人だって、かーちゃんが言った」

子供たちが口々に説明する。

「ふうん」

リュウトが唇を曲げる。

「そんなことより、遊ぼうよーリュウト」

「で、その狭伊サマはどこに住んでるの？」

袖を引く子には構わず、リュウトは冷えた瞳で尋ねた。

「あっち。川をずーっと下ったところにお堀があるでしょう？ そこの大きなお屋敷にえらい人はみんな住んでるのよ」

少し年上らしい女の子が川のほうを指差して言う。

「へえ、ありがと」

リュウトは女の子の頭を撫でた。女の子がはにかんで笑う。

「なあそんなことより、遊ぼうぜ、リュウトー」

「そうだよー」

子供たちがリュウトの服の裾を引く。

「うん、また今度な」

リュウトはそっけなく言って、駆けて行ってしまった。子供たちの不平が背中に投げつけられるが、リュウトの耳には届いていなかった。

子供たちの声に、足を止めて振り返ったのは明里だ。小さくなるリュウトの背中を見送って、ふてくされた子供たちのほうへと足を向ける。

「ねえ、リュウトはどうしたの？」

少し背を屈めて、明里が尋ねた。

「わかんない。最近ちっとも遊んでくれないんだ」

リュウトの袖を引いていた男の子が唇を尖らせて不平を露に言った。

「狭伊さまのこと、訊いてたのよ。怖い顔をした」

屋敷のことを教えた女の子が、目をぱちぱちと瞬きながら言った。

「狭伊様の、ことを？」

明里はリュウトの去ったほうを眺めやる。川のほうだ。屋敷へ行くつもりなのだろうか。行って、何をやるつもりなのか。

明里は胸元で、ぎゅっと拳を握りしめた。胸騒ぎがする。

「あ！ 鈴ちゃん！」

と、先ほどの女の子がふらりと安定を崩して、地面に倒れた。

「大丈夫っ？」

明里が慌てて抱き起こす。顔色が悪い。ひどい熱だった。

「大変……」

明里は急いで彼女を背に負った。

そこへ、会話が聞こえてくる。

「あの子、さっきあいつに頭を触られて……」

「やっぱり……」

子供たちに手伝ってもらって、女の子を背負い上げた明里は、その会話が聞こえたほうを睨みつけた。視線に気づいた郷人は、気まずそうに視線を外し、空々しい会話に戻る。

「何よ……」

明里は唇を噛みしめた。

握ってくれたリュウトの手を思い返していた。

リュウトは一心に駆けて、あっという間に領主が住むという屋敷に到着した。繁みの影に隠れて、様子を窺う。屋敷は川から引いた堀にぐるりと囲まれて、さらに背の高い、尖った木の柵でぐるりと囲まれていた。中がどうなっているのかはここからでは窺えない。

入り口は一箇所ようだ。門番が二人、暇そうに立っている。

少しだけ、リュウトは考えるように手を顎に当てた。素振りだけだ。長くは思い悩まずに、門番のほうへ歩いていく。

「何だ、少年」

「ここは遊び場じゃないぞ」

すぐに気づいた門番の男たちが、大儀そうにリュウトのほうを向く。しかし、リュウトは人懐こい笑みを浮かべて身軽に近づいていった。

「ねえ。ここに、狭伊サマっているんでしょ？」

リュウトの言葉に、男たちは顔を見合わせる。

「それがどうした。まさか、狭伊様のお知り合いというわけでもなからう」

男の一人が片手を腰にあて、リュウトの背に合わせるようにぐっと身を屈めて眉を寄せた。

「会いたいんだ。会わせてよ」

屈託ない調子でリュウトが男を真っ直ぐに見返す。

男たちは肩をすくめながら、再び顔を見合わせた。

「そういえば、こないだも変な娘が来たよな。狭伊様のお嫁にしるとか何とか言ってさ」

「ああ、来たな、そういえば。ありゃあちょっとすごかったなあ」

男たちは眉と口元をゆがめる。

「ねえ、そんなことより狭伊サマに会わせてってば」

少し苛立ってリュウトが地面を踏んだ。

やれやれ、というため息が返される。

「あのなあ、少年。会いたいといって、簡単にお目通りの適う方ではないのだ。大体、何の用があるというのだ」

「それは……」

リュウトは言葉に詰まり、唇を噛む。

「ほら、帰った帰った」

猫でも追い払うように手を振られる。

リュウトが反論しようと口を開いた矢先、軽い震動と共に馬の蹄の音が近づいてきた。

「おや、狭伊様のお帰りだ」

「え」

男たちは道を開ける。ぼーっとしていたリュウトも腕を引かれ、むりやり頭を上から押さえつけられた。

「何すんだよっ」

「大人しくしている」

そうしているうちに、馬が土煙を上げて鼻の先を通り過ぎていく。

リュウトは力任せに押さえつける男の腕を押しつけて、顔を上げた。一瞬だけ仰いだ狭伊の顔を、網膜に焼き付ける。

「こら！ いい加減にしないか、こいつ！」

襟首をつかまれそうになって、リュウトは素早く身を避けた。

「ねえ！」

飛ぶように後ろへ一歩二歩と下がって、リュウトが声を上げる。

「あの人は毎日出かけるの？」

「そりゃあ郷の視察がお役目だからな。おいおい、馬鹿なことを考えてるんじゃないだろうな」

「馬鹿なこと？」

後ろへ飛び跳ねるように彼らから距離をとりながら、リュウトは不敵な笑みを浮かべた。

「馬鹿なことなんかじゃない。全部が上手くいく方法、だよ」

おかしい顔をした男たちにひらりと背を向けて、リュウトは一目散に道を駆けて、あっという間に見えなくなってしまった。

明里は上の空だった。ぼんやりと緩慢な動作で藁を叩いていると、佳織が心配そうにその顔を覗き込む。

「明里？ 大丈夫、疲れているんじゃないの？」

「姉さま」

ぼんやりとした視線を返すと、佳織はさらに心配そうに眉を寄せた。

「風邪でも引いたんじゃない？ 最近、流行っているみたいだから気をつけないと」

「ううん。大丈夫」

明里は首を振って、笑みを見せた。

「そう？」

「平気よ。姉さまは心配しすぎだって」

日が落ちて、隙間風が冷たくなってきた。囲炉裏の火が、凍えるように小さく震える。

「少し薪を足しておこうか」

佳織が立ち上がって、外に出ようとした。

「あら？」

戸口のところで佳織が立ち止まる。

「どうしたの？」

不審に思って、明里も腰を浮かせた。

「お客さんみたいよ？」

微笑んで佳織が明里を振り返る。居心地悪そうに、リュウトが立っていた。

「リュウト。どうしたの」

慌てて明里は立ち上がる。道ばたで彼と会って話をするのは会ったが、こうして家まで訪れて来たのは初めてだ。藁と木槌を放り出し駆け寄ると、背後で佳織が笑いを噛み殺している気配を感じ、耳が赤くなる。

「あ、うん」

リュウトは何か言いたげに口を動かした。視線がちらりちらりと佳織のほうを向く。彼女がいる前では言いにくいものらしい。

「ちょっと、こっち」

明里も佳織の前では何だか面映く、リュウトの背を押し出すように外に出た。

気の早い星がまだ薄明るい空に光っている。

外は身を切るような鋭い空気だった。しかし、火照った頬の熱はなかなか冷めてくれない。

「どうしたの、一体」

困惑しながら、明里はリュウトを見上げた。

「さっきの人が、明里の姉さま？」

「そうだけど」

「へえ。綺麗な人だね」

誰にでも自慢の姉だけれど、何故かリュウトの言葉に明里はむっと不機嫌になるのを感じた。

「それで、わざわざ家まで来るなんてどうしたのよ。まさか姉さまを見に来たとか言わないでしょうね」

自然、言葉も尖ってしまう。

「違うよ。どうしても、明里に伝えたくなくて」

屈託のない笑みで、リュウトはぎゅっと明里の手を両方の手で握った。

明里の心臓が跳ねる。

「何」

「うん。きっと、俺が全部良いようにするから。明里は安心していいよ」

無邪気な笑みでそう告げると、すぐに手を離し、それじゃあとあっさり背を向けて、森のほうへ駆けていってしまう。

「何なの？」

明里は握られた手を胸元へ引き寄せながら、唇を尖らせた。

置き去りにされたような寂しさに、ちくりと胸が痛んだ。

「明里。こんなところで何してるんだい」

外から帰ってきたらしい母の絹が、家の前で佇む明里を見つけて声をかけた。

「母さま。別に、何でもないけれど」

歯切れの悪い口調で明里が呟く。

けれども、そんな明里の様子を気にかけて風もなく、絹は暗い面持ちでため息を吐いた。

「鈴ちゃん、相当悪いみたいよ。あれは助からないんじゃないかねえ」

告げられた一言に、明里は先刻までの憂いが吹き飛んだ。鈴は、先ほど明里が送り届けた少女だ。

「そんなに・・・・・・・・？」

確かに苦しそうで、ひどい熱ではあったが。助からない、と簡単に告げられた残酷な言葉が、まるで現実味を伴って
いなかった。

「あんた、あの子を送り届けたんだって？ うつされたり、してないだろうね？」

心配そうな、母の言葉に、明里はただ首を振る。

嫌な風が、頭上の枯れた枝を震わせた。

洗濯物を抱えて表に出た明里は、騒がしさに気がついて、川へ急ぐ足を止めて振り返った。

「何かあったの？」

同じく洗濯に行こうとしていた同年代の娘に訊いてみる。

「さあ。ねえでもあれ、狭伊様じゃあないかしら」

「え」

騒ぎの中心にある馬に乗った人物は確かに狭伊だ。

こちらへ徐々に近づいてきた。人垣が彼の周囲をかこっている。

「離せ！ 離せよこのやろう！」

明里は耳を疑った。

その声には、聞き覚えがあった。はっとした瞬間には洗濯籠を投げ出して駆け出している。

「口の利き方を教えてくれるものもいなかったか。哀れな子だな」

狭伊の冷たい声音と共に、乾いた鞭の音が響いた。

「うっ」

うめき声と共に、見ていた女たちの中から悲鳴が上がる。

明里は人ごみを押しのけて、その光景を見た。

息を呑む。

「リュウト」

乾いた唇が、その名を辿るのを、別人のような声で聞いた。

呼ばれたその人が、ゆらりと顔を上げる。

彼女の顔を見つけると、その瞳は驚きに見開かれ、それから、気まずそうに伏せられた。

「おや、明里どのお知り合いでしたか？」

馬上の狭伊が冷えた声を降らせた。

「あ……………」

明里は狭伊を見上げ、一度唾を飲み込んだ。針の玉でも飲み込んだように喉がひりつく。

「彼が、何かしたのですか？」

リュウトは両手両足を縛られて、狭伊の馬に引きずられていた。衣服は破れ、土にまみれ、打擲の痕が、むき出しになった腕や足、顔に生々しく残っていた。まるで自分の体も痛むように、明里は自身の体を抱きしめる。

「ふふっ。私はこの少年に殺されかけたのだよ」

「えっ……………」

狭伊の言葉に明里は声を失い、周りに集まってきていた郷人たちがざわめく。おそろしい、やはり、とんでもない、なんてこと……と不安の波紋が広がった。

「残念ながら失敗したから、私は今こうしてここにいるわけだが。なかなかぞっとする弓の腕前だったよ」

狭伊はリュウトを見下ろして、笑みを浮かべた。

リュウトは怖ろしいほどの憎しみに滾った視線を狭伊に向ける。その視線の鋭さに、取り囲んだ人々はおろか、明里も思わず後ずさりたくなるほどだった。

「どうやら、この子の中には邪鬼が潜んでいるらしい。川で祓い清めてやろうと思うてな」

「川で……」

傷だらけで、両手両足をしばられたリュウトを川に流そうというのか。

明里は青ざめた。

「そんなことをしては、死んでしまいます！」

「それで命を落としたならば、こやつが邪鬼に勝てなんだということ。仕方あるまい」

「そんな……！」

蒼白なのは明里一人だ。

周囲の郷人は皆、どこかほっとしたような雰囲気ですらある。

リュウトがどう思っているのかは分からなかった。俯いて、ただ沈黙を守っている。

明里は唇を噛んだ。一つ息を吸い込むと、意を決したように、狭伊を見上げる。

「お願いします、狭伊様！　どうかこの者をお許してください。彼は野で暮らす者。おそらく弓もなにか野生の獣を狙っていたもので、狭伊様のお命を狙ってというのは間違いでしょう」

「ほう？」

狭伊が興がるように眉を上げる。

顔を上げたリュウトがなぜ、というように驚いた瞳を明里に向けていた。

「違う。俺は……」

「あなたは黙っていて！」

強い口調で明里がリュウトの言を遮る。

「お許してください、狭伊様。どうか、お慈悲を与えてください。彼にはわたしからよく言って聞かせます。どうか」

膝をつき、明里は狭伊に頭を下げる。

「明里っ！」

リュウトが悲鳴のような声を上げた。

「おやおや」

狭伊は軽く肩をすくめる。

「お願いします、狭伊様」

「明里、どうして……」

頭を下げる明里に、リュウトが絶望的な視線を送る。

周囲の人垣は思いがけない事態にざわめいた。

狭伊はそんな明里とリュウトを見比べて、考える素振りを見せる。やがて、興が冷めたように、馬の鞍につないでいたリュウトを引きずる縄を短刀で切り落とした。

「此度のことは、明里どのに免じて許してやろう。二度はないぞ」

「ありがとうございます」

「少年、明里どのによくよく感謝をするのだな」

冷たい一瞥をリュウトに投げると、狭伊はそのまま馬を返して去っていった。

地面に放り出されたリュウトに明里が駆け寄る。

すぐに縄をほどこうとしたが、上手くいかない。

「何か持ってくる。ちょっと待ってて」

立ち去りかけた明里をリュウトは呼び止めた。

「明里！」

「なに？」

感情の読めない瞳で明里が振り返った。

郷人たちは、遠巻きに、不安気な視線を二人に投げる。

リュウトは地に放り出されたまま、泣きそうな目で、明里を見上げた。

「どうして、あんなことしたんだよ？」

「あんなこと？」

明里は首を傾げる。

「俺を助けるために、あいつに頭を下げたじゃないか」

リュウトの声は震えていた。

「何だ、そんなこと」

明里の声は冷えている。

「そんなことって！」

「そんなことだわ」

息巻くリュウトの声に被せるように明里が言った。

彼女はリュウトに向き直り、抑えていた感情が溢れたように、その瞳に怒気を燃やす。

「あなたこそ！ どうしてそんな馬鹿な真似をしたのよ。狭伊様を殺そうなんて……」

明里は肩を震わせた。

「明里」

リュウトは自由にならない体をもどかしげに動かす。明里の頬を、一筋の涙が伝った。

「馬鹿、馬鹿、馬鹿っ」

地面を踏みつけて、明里が叫ぶ。

「……ごめん」

縄をほどいて、とリュウトが言った。これじゃあ明里の涙も拭えないよ、と泣きそうな顔で笑った。

それから三日ほどのち。熱で倒れた鈴が亡くなった。

そして一人、また一人、と子供たちが熱を出して倒れるようになった。病魔は子供に広がると、高齢者や大人にまで手を出すようになった。そうしてあっという間に郷には病に伏す人々が蔓延した。

「三太も倒れたの？」

あちこちの看病に顔を出している絹が戻って告げた言葉に、明里は目を見開いた。

「ああ。まあ、体力のある男なら命を落とすことまではないだろうっていう話だけだね。あんた、ちょっと見舞いにいっておいで。後から悔やむことになっても、遅いから」

絹の声には疲れが見えた。その声音に、明里は口から出かかった反論を喉の奥に押し戻す。

「わかった。ちょっと行ってくるわ」

手仕事を切り上げ、明里は素直に頷くと立ち上がって外に出た。

戸外に出ると、冷たい風が吹きつける。明里は肩を縮め、腕を抱いた。吐く息が白く、空に上っていく。その先を、視線が追った。分厚い雲が、重たく空を覆っている。雪が降るかもしれない。

そういえば、今年はまだ雪を見ていないな、とぼんやりした頭の一部が呑気なことを思った。

外を歩く者はほとんどいなかった。時々すれ違う人も背を丸め、陰気に地面ばかり見て歩き、こんにちは、と明里が挨拶をしても、何かもごもごと口の中で呟いて視線を逸らすだけだった。

先日のがあってから、明里は郷人から少し遠ざけられていた。無理もない、と理解はするが、胸の内にも冷たい風が吹きぬける。

「でも、きっと、いつか分かってくれるはずだわ。だって、リュウトは決して悪い人じゃないんだもの」

狭伊を害そうとしたことには驚いたが、泉の媛に育てられたのだという彼は、きっと人の常識を知らないのだ。それは明里が少しずつ教えてやれば良い、そう、思っていた。

「本当に、驚いたけれど」

呟いて、思わず口の端に笑みが上っていることに気がついて、明里は慌てて指先でそれを消した。

笑みを浮かべるなんて不謹慎だ。でも、嬉しい。涙が出そうなほど、嬉しい。

行動の是非ではない。明里の中に渦巻いた、怖ろしい気持ちを、リュウトは拒絶も、軽蔑もしなかった。嬉しい。救われた、と思う。

「でもあんなこと、二度としないでっでもう一度ちゃんと言っておかなきゃ」

あの時に一度言ったけれど、リュウトはちゃんとはわかっていないように見えた。不服そうな顔をしていた。狭伊を睨みつけた、リュウトの視線を思い出し、明里はぶるりと身を震わせた。

あんな顔をさせたくない。いつも明里や子供たちにしてみせるような、無邪気な笑みのリュウトでいてほしかった。

ああそうか、と、唐突に気づく。

こんな気持ちだったのだろうか。信乃も。佳織も。

守りたい。

何ものからも守りたい。他の誰でもなく、自分が。

たとえば、傍にいられなくても。

明里は空に真っ白な息を吐いた。

きん、と瞳の奥まで冷たくなるような空気。

久方ぶりに、凧いだ気持ちだった。心臓だけが、わずかに高揚している。

「こんにちは」

浮いた声で三太の家の入り口をくぐって、明里は慌てて笑みを引っ込めた。

「ああ、明里ちゃん。わざわざ悪いねえ」

三太の母が片手を頬に当て、明里に笑いかける。

「いえ。三太さんの具合は？」

尋ねながら明里は、家の奥に目を向けた。藁の筵に丸太のように三太の図体が転がっていた。思わずどきりとするが、胸は大きく上下している。

「栄養つけて大人しく寝てりゃ治るんだよ。だらしがないもんだから、風邪になんかやられちまってねえ」
苦笑混じりに三太の母は言うが、瞳に心配の色は濃かった。

明里は曖昧に頷いて、三太の枕元に膝をつく。

「三太、大丈夫？」

明里が声をかけると、三太は億劫そうにまぶたをあげた。

「もう駄目だ。死ぬ」

「そういう人は死んだりしないわ。安心した」

半眼で見下ろして、軽く三太の額を叩く。熱はかなり高そうだ。

「あいつのせいだ」

熱のこもった声で、三太が呻く。

「何よ、あいつって」

「あいつだ。こないだ、狹伊様を害そうとした馬鹿な奴。その前は、お前を攫ってったじゃないか。あの鬼が郷を滅ぼそうとしてるに違いない」

「リュウトはそんなことしないわ。あんたこそ、馬鹿なこと言わないで」

熱があるから、そんな下らないわ言が出るのだろう、と明里は腕を組んだ。

けれども、その認識は甘かったのだと、明里はすぐに理解することになる。

翌日のことだった。

「鈴が死んだって、聞いて」

リュウトが明里の元を訪れた。鈴の墓を見舞いたいので案内してほしいという。

「うん」

明里はリュウトを伴って、川向こうの墓所を訪れた。

整然としたものではないけれど、こんもりと盛られた土の丘がいくつか並んでいる。

「あ」

そこには一人の女性がいた。

鈴の母だ。

彼女も気づいて、目を開く。

「ああ、明里ちゃん」

「こんにちは。あの、彼が鈴ちゃんを見舞いたって」

明里は小さく頭を下げて、後ろのリュウトを紹介した。

「こんにちは」

固い声で、リュウトが頭を下げる。

その時、彼女の顔が青ざめるのを見た。

「あなたがっ」

立ち上がり、何かにとり憑かれたような表情でリュウトを睨みつける。

「あのっ」

「あなたのせいで、鈴が・・・！」

彼女はリュウトに掴みかかった。

「な！」

「落ち着いてください！」

明里が必死に止めようとする、彼女に突き飛ばされる。それを見たリュウトが、

「何するんだよっ」

彼女の手を力任せに振り払った。

彼女は地に尻餅をついて、泣き始める。あんたが、あんたのせいで。恨み言を並べ立てながら、瞳は怖ろしい光を宿して、リュウトを睨みつけていた。

「何がだよ」

リュウトは困惑するような、怒ったような、瞳で彼女を見下ろす。

「行こう、リュウト」

いたたまれず、明里はリュウトの背を押した。

背中になんかでも、彼女の鳴き声ははりついてくるようだった。

納得していないリュウトを無理矢理森へ帰して、明里は郷へと戻った。

前方から馬の蹄の音を聞いて、明里は立ち止まり、道をあける。

しかし、馬は明里を見とめると、いななきを上げて立ち止まった。

「？」

明里が訝しげに見上げる。馬上のその人は狭伊だ。

「あ」

気まずげに、明里は口を開き、瞳を逸らす。

「やあ、明里どの。彼は、元気かな？」

狭伊は涼やかな声を馬上からかけた。彼を森に帰っていて良かった、と明里は思った。

「その節は、寛容くださり、ありがとうございました」

明里は地面に膝をつく。不思議とそのことに、悔しさを感じなかった。以前ならば、できなかったことだ。リュウトのためだからだろうか。

「済んだことだ。私は気にしてはいないよ。しかし、私以外の者は、気にしているようだがね」

「どういう……？」

明里は顔を上げた。狭伊が笑みを浮かべている。その笑みに哀れみを感じて、明里は意外なものを見たように、目を見開いた。

「随分嫌な病が流行っているようだね」

「ええ」

「何が原因なんだろうね。これ以上の死者が増えるのは、とても悲しいことだ。早急に原因を排除して、病を郷から一掃しなくてはならないね」

「はあ……」

明里の間抜けな返事に、狭伊はますます哀れむような瞳を向けた。

「今日は佳織どのの様子を見にきたんだ。まだ病にかかってはいないようで何よりだが、このように病の流行った郷に置いておくのは心苦しいからね。婚姻の前に、私の屋敷に移っていただくことにしたよ」

「えっ」

「急なことになってしまって、君にはすまないとも思っている。しかし、これが私のやり方だ。私なりに、佳織どのを守ろうとしていることはわかってもらえると嬉しいね。義妹に、なるわけだからね」

明里はその笑みを、初めて嫌味に感じなかった。

明里の返事を待たずに、狭伊は馬を駆って去ってしまった。

家に戻る。

佳織と絹は、慌しく荷物を作っているところだった。

「ああ、明里。どこへ行っていたんだい、早く手伝っておくれ」

「うん」

明里は絹に頷いて、佳織を見る。

「明里」

「狭伊様に会ったよ」

「そう……」

「ごめんね、姉さま」

明里は顔を俯けた。

「どうしたのよ、急に」

佳織は優しい声で笑う。

「何にもわかってなかった。わがママを言って、姉さまを困らせて、ごめんなさい」

「あらあら」

佳織は笑って、明里の頭を胸に抱き寄せる。

「姉さま……」

「可愛い妹に困らされるのも、姉さまの仕事よ。どこにいても、いつも、あなたのことを心配しているわ。転んで怪我をしていないかしら、お転婆をして母さまに叱られていないかしら、短気を起こして男の子を叩いたりしてないかしらって」

「もう、姉さま」

抗議するように明里が顔を上げると、やわらかく笑む佳織の顔があった。

「ほらほらあんたたち、手を動かさなさいよ。今夜はそれでなくても慌しいのに」

絹が苦笑しながら手を叩く。

「まだ何かあるの？」

目元を拭いながら、明里が尋ねた。

「男衆が、今夜鬼退治に行くらしいよ」

「鬼退治？」

「そう、この流行病を連れてきた鬼を退治して、郷を守るって息巻いてるよ。まあそれで、この病が治まるんなら良いけどねえ」

「鬼って……」

心臓が跳ねる。明里は服の胸を掴んだ。

「明里」

佳織が明里の肩に手を置く。

その瞳が、明里の悪い予想を肯定していた。

「そんな……なんで？」

いつか分かってくれと信じていた。

リュウトはやさしい人なんだって。

少しずつ、分かり合えたら良いと。時間は、まだまだあるのだから、と。

「明里、その荷物をまとめておくれ。明里？」

「わたし、行ってくる！」

「明里？」

引き止める声はもう明里の耳には届いていなかった。

森へ。

明里は一心に駆けた。

「災いがくるよ」

と、彼女が言った。

泉の水面の真中に立ち、彼女は曇天の夜を物憂げに見上げていた。

「災い？」

リュウトは彼女の視線を追って、夜を見上げた。くしゃみをひとつ。

「そう」

彼女は静かに言って、一度瞳を閉じると、ゆるゆると開いてリュウトを見つめた。その動きに合わせてるように、リュウトの首も彼女を向く。

「災いって？」

「ねえ、リュウト。おまえはまだあの娘を好いているのかえ？」

リュウトの問いには答えずに、彼女はやさしい眼差しを彼に据えた。

「好きだよ。大好きだ」

迷いなく、リュウトが言い切る。

「そう。ねえ、リュウト。では、おまえは何を望む？」

「明里と一緒にいたい」

「そうだね」

「でも、俺と一緒にいても、明里は幸せになれないかもしれない」

「そう」

「よく分かんないけど、こないだも、明里を泣かせた。今日だって、辛い顔をさせた。笑ってほしいのに、うまく出来ないんだ」

「そうなの」

「うん。でも、明里と一緒にいたいんだ」

リュウトはまっすぐに、彼女に視線を注いだ。

「わかったよ。可愛い子。私のリュウト。我が守ってやるから、おまえは安心しておおき」

「母さま？」

慈しむような瞳の彼女に、リュウトは首を傾げる。

「リュウト！」

その時、息せき切って明里が茂みから転がり込んできた。

「明里っ？ どうしたの？」

息を切らせた明里は、リュウトの姿を見ると、力が抜けたように膝をつく。リュウトは慌てて明里の傍に駆け寄った

。

「良かった。間に合って」

「何が？ 大丈夫、明里？ 郷で何かあったの？」

助け起こそうとするリュウトの手を取って、明里は泉の水面に佇む彼女に目を向けた。

「御前をお騒がせして、すみません」

「良い。分かっているよ」

頷いた彼女に、ほっと明里は微笑んだ。微かに、彼女も笑みの気配を見せる。

「俺は分かんないよ。何なの、明里？」

握る手に、リュウトはぎゅっと力を込める。

ちょっと待って、と明里は大きく一度深呼吸をして、鼓動を落ち着かせた。

「みんなが、ここに来るの。鬼を祓いに」

「鬼？」

「あなたのことよ、リュウト」

「……俺？ どうして？」

リュウトは混乱したように、目を瞬いた。

「病気が流行っているのは知ってるわよね？ みんなはあの病気が、リュウトが流行らせたんだって思ってる。ううん、思っていないくても、これ以上の病気の蔓延を防ぎたくて、あなたを祓おうとしているの」

「言っていることが、分かんないよ、明里」

「だからね……！」

懸命に説明しようとする明里を、泉の彼女が制した。

「不安なことには因果が欲しい。そしてそれを排除することで安心を得たい。未だ、この世は変わらぬか」

「母さま？」

「理由はあとからじっくり考えるんだよ、リュウト。今は時間がなさそうだ」

彼女の視線が、二人の向こうを睨みつけた。

暗闇を、火灯りが近づいてくる。不揃いに地を鳴らし、重たい鉄の擦れる音がする。

明里の肩がびくりと震えたので、リュウトは反射的に彼女の肩を抱き寄せた。瞳は近づいてくるその火を凝視している。

暗闇がやがて、人の形を浮かび上がらせる。一人、二人、三人、と数を増やし、十数名の若者から壮年の男衆がぞろりと姿を現した。

彼らは泉の水面に立つ彼女を見て、ぎくりと軋むように前進を止めた。息も止めたような沈黙が張りつめる中、そこに、いるはずのない人物を見とめて、思わず声上がる。

「明里ちゃんじゃないか。そんなところで何をしている」

「あ」

立ち上がりかけた明里を、リュウトが抑える。

「やはり、こいつ……！」

「郷を病魔に襲わせて、彼女を攫うつもりだったんだ」

「子供の姿をとりながら、何て卑劣な」

男達がざわめく。

「皆、違うのっ」

明里はたまたま、リュウトの手を解いて立ち上がった。

「明里ちゃん。すぐ、その子から離れるんだ」

発せられた声に、明里は続く抗議を思わず呑み込んだ。

目を見開く。集団の中から、一人の青年が歩を踏み出した。

「信乃、兄さま……」

震えた唇から、他人のもののような声が零れ落ちた。

「おいで、明里ちゃん。早く」

信乃が片手を差し出す。

少しだけ困ったように下がった眉。片方だけ二重の眼。とおった鼻筋。優しげな口元。

ずっとずっと、見つめてきた彼が、おいでと明里に手を伸ばしている。

吸い寄せられるように、一步を踏み出す。

ほっとしたように信乃も微笑むと、強張っていた明里の頬もわずかに緩んだ。

「明里！」

腕を取られる。

はっ、と信乃の顔が強張った。

それを見て、明里の顔もびくりと固まる。明里に差し出したほうと別の手に、信乃は鎌を握っていた。松明の火に、その刃が鋭さをもって鈍く光る。触れてもいないそれに、明里は肌を切られたような痛みを感じた。指先から血の気が失せていくようだった。

「信乃兄さま、聞いて」

掠れた声を、明里は吐き出した。呼吸が苦しい。重たい石を呑み込んだかのようだ。

引き止められた手に、明里は自身の手を重ねる。ふっと胸の内の石が溶けて、温かさが満ちた。

「明里ちゃん、こちらへ来るんだ。お願いだから」

信乃が一步を踏み出して、さらに手を伸べる。

明里は静かに首を振った。

「今は行けないわ。兄さま、皆、わたしの話を聞いて。リュウトが一体何をしたと言うの？ 彼は流行り病とは関係ないわ。冷静に考えれば、分かるはずでしょう？ 彼は鬼でも何でもなし。わたしたちと同じ、温かい血の通った人間だわ」

「明里……」

腕をつかむリュウトの指先がびくりと震える。

「大丈夫。わたしがあなたを守るわ」

小声で呟いて、明里は強い眼差しで、立ちふさがる男達を見やった。

「だが、そいつは狭伊様を害そうとした怖ろしい奴だ」

「大体、このような荒れ果てた森に住み着いていることが、鬼である証ではないか。先ほどから、その泉に浮いているのは妖異の類だろう」

「そうだ。それに、こいつと一緒に遊んでいた子供たちから死んでいったというではないか」

「明里もすでに妖の術に当てられて、誑かされているのではないか」

口々に吐き出される言葉に、明里は肩を震わせた。

「違うわ！」

叫んでも、うろんな瞳が返ってくるばかりだ。

伝わらない。

伝えられない。

「どうしてっ！」

唇を噛んで、溢れ出しそうになる涙を堪えた。

伝わらない。

届かない。

通じる言葉を持っているのに、どうしてこんなにも届かないのか。

「明里ちゃん……」

その声に、縋るように視線を上げた。

「信乃兄さま！ 兄さまなら、分かってくれるわよね。リュウトのせいじゃない。リュウトはとても優しい人なの。ねえ、信乃兄さま。リュウトに何かしても、病が治まるわけないわ」

「……そうかもしれない。明里ちゃんの言う事は、正しいんだろうと思うよ」

「それじゃあ！」

信乃の答えに、明里は一瞬瞳を明るくする。

「けど、ここは引けない。君を彼にはあげられない。彼がこの地を去ってくれるというのなら、俺たちもこのまま帰ろう。分かるね、明里ちゃん。君には幸せになってほしい。そのためには、彼と一緒にいてはいけないんだ」

子供を諭すような、懸命な口調だった。

どうして、とまた明里は呟く。信乃だけは、分かってくれると思っていたのに。どうして彼もまた、分かってくれないのか。信乃のやさしさは分かる。痛いほどに、それは分かるのに。その手を、取ることはできない。

「わたしは、リュウトと一緒にいたい」

口に出すと、それは、幼子のわがままのように響いた。

腕をつかむ手を、ぎゅっと握る。

「リュウトと一緒にいたい」

何を分かってももらえなくても、それだけは分かってほしかった。

「ごめん。明里ちゃん。その我儘は聞けないよ」

力づくで明里を引き寄せようと、信乃が手を伸ばした。

「駄目だ」

リュウトが前に出る。背中に明里をかばった。

「できれば、君を傷つけない。大人しく、明里を渡してここから去ってくれ」

信乃が普段はあまり見せない厳しい視線でリュウトを見た。

「どうして」

リュウトは冷えた目で信乃を見据える。

信乃の後ろに控えていた男達も、じりじりとこちらへ近づいてきていた。

「それが一番、誰も傷つかない方法なんだ。明里のためを思うなら、言う通りにしてくれ」

「明里は俺と一緒にいたいって言った。俺だってそう思ってる。わかんないのは、あんたたちだ」

リュウトの真っ直ぐな視線に、信乃は言葉に詰まる。

「信乃、鬼に言葉など通じるものか。早く捕まえろ」

「そうだ、そうだ！ こうしている間にも郷で苦しんでる者たちがいるんだぞ」

信乃の後ろから、男衆が困いを詰めてくる。

「ああ。すまない、でも後できっとこうするのが良かったんだと分かるから」

信乃がリュウトに手を伸ばす。

リュウトはその手を片手で払った。

「こいつ」

「やっちなえ」

男達が一斉に、リュウトに掴みかかる。

「何すんだよ」

数には敵わず、リュウトはあっという間に組み伏せられてしまった。

「やめて！ どうしてこんなことをするのっ？」

「明里ちゃん、暴れないでくれ」

後ろから抱きとめられるように囚われた信乃の腕の中で、明里がもがく。

「明里を離せ」

リュウトは信乃を睨みつけ、顔を上げたが、すぐに頭を上から押さえつけられた。

「おい、早く縄で縛っちなえ」

リュウトを押さえつけた男が言う。

「離せよ」

渾身の力で、リュウトは男を突き飛ばす。

「リュウト！」

「このやろう」

つかみかかってくる男達を、持ち前の身軽さでかわし、打ち身を当て、足を払う。倒れた一人の男の手から松明が落ち、乾いた地面に転がって、枯れた草を火が這い、灰色の木へあっという間に上っていく。

「くそっ、このままでは火に巻かれるぞ！」

「いいから、早くあいつを捕まえろ！」

「生温いことを言わずに、動けなくしてやればいい！」

乾いた空気に、火のまわりは早かった。

木々が、曇天に赤々と燃え盛る。

男達の瞳に、焦燥と怖気が浮かぶ。

「うああああ」

ついに一人が、竹槍をリュウトへ突き出した。

「リュウト！」

「くっ」

すんでのところではリュウトはその攻撃をかわし、足を突き出すと、男の腹を渾身の力で蹴り飛ばした。男の手から零れた竹槍を素早く拾い、飛び掛ってきた男達を一閃して凪ぐ。

獣のように目を細めたリュウトは、迷わずその切っ先を信乃の首元へ突き当てた。

「明里を離せ」

冷えた声音に、信乃の喉が鳴る。その拍子に、喉の皮膚がかすかに槍の先端に触れた。

「リュウト、やめて」

狭伊に対して向けられていたような、怖ろしいリュウトの瞳に、明里は怯えた。

「こいつが明里を離せばやめる」

竹槍を持つリュウトの拳に力が込められた。

「リュウト、後ろ！」

はっ、と明里が叫んだ瞬間、リュウトは素早く振り向いた。

しかし、その時には鎌を振りかぶった男が眼前に迫っている。すぐに槍を返したが、間に合わない、と本能的に悟って、リュウトは思わず眼をつぶった。

「っ！」

痛みを覚悟する。しかし、上がったのはリュウトの悲鳴ではなかった。

「まったく、手のかかる坊やだよ……」

親しんだ静かな声音に、リュウトは眼を開く。

「母さま……」

紙を裂かれたように、肩から胸にかけて、体を鎌の軌跡で引き裂かれた彼女が、顔だけ振り向いて微笑んでいた。

「ひ、ば、化け物……」

鎌を振った男が、わなわなと震えて後ずさる。

「おまえがっ……！」

リュウトは憎悪を込めて、槍を突き出した。

「ひっ」

「リュウト、駄目っ！」

悲鳴が交差する。

「え」

リュウトは水の匂いに包まれていた。やさしい手が、髪を撫でる。

「母、さま？」

「リュウト。可愛い子。愛しい、私のリュウト。人を傷つけてはいけないよ。おまえがあの子との未来を望むのならば、人を、傷つけてはいけない」

やわらかく、彼女が微笑む。

「あ」

リュウトは自分の手を見下ろした。槍を握っている。鉄さびたその尖端は、深々と彼女の胸を貫いていた。

「か、母さま？」

リュウトの手が震える。怯えたように、自分の手と、彼女の顔を見比べた。どうしたら良いのか分からない。

「これで良い。ねえ、リュウト。おまえには分かるまい。我が今、どんなに幸福か。おまえを愛した。愛したおまえを守れた。幸せにおなり。我はいつでも、それを祈っているよ」

リュウトの頬を涙が伝う。

「おい、本気でまずいんじゃないか。火の回りが強くなってきた」

「退路は確保できているのか？」

木々に燃え移った火は勢いを増し、男達が騒ぎ出した。

その様子に、もはや輪郭も臃になった彼女が眼を向ける。

「リュウト」

「はい」

「愛している」

抱きしめられ、告げられる。

その瞬間、彼女は眩い光となった。

泉の水が、共鳴するように輝き、どん、と地を鳴らすような大きな音と共に噴き上がる。

「うわっ」

「何だっ」

どよめく彼らの頭上に、噴き上がった泉の水が注いだ。

燃え盛る木々や草にも神々しい光のように、それは降り注がれる。

「火が……」

消えていく。

混乱の落ち着いた大地に、リュウトが一人で膝をついているのが眼に付いた。

「リュウト！」

信乃の腕が緩んだ隙に、明里が彼に駆け寄る。

「明里」

ぼんやりとリュウトが顔を上げる。

涙の痕の残る頬に、明里は手を当てた。

「怪我はない？」

「君こそ」

明里の手に、リュウトの手が重ねられる。

男達は戸惑ったように、彼らを見つめ、あるいは眼を逸らした。

「あ」

息を吐き、天を仰いだ信乃が声をあげる。

白い一片が、舞い降りてくるところだった。

気づいた他の者たちも、一人、二人、と空を見上げる。

はらはらと雪は舞い降りて、焼けた大地を少しずつ白く覆っていく。

声もなく、彼らはしばらくの間、その幻想を見つめていた。

月夜を、川向こうの丘に向かって明里は駆けていた。

茂みを分けて、傾斜を上がっていくと、素っ頓狂な笛の音が聞こえてきて、くすりと吹き出す。

「ちっとも上手にならないんだから」

呆れながらも、口元はほころんでしまう。

暇つぶしにと笛の練習を始めた彼だったが、どうにも相性が悪いのか、一向に上達の気配を見せない。何か他のことにすれば良いのにと言ったのだが、彼自身は笛の練習が気に入っているようで、毎夜毎夜飽かずにこうして怪奇な音を響かせている。

丘の頂上まで来た。

桜の木が一本、春の訪れを祝福しているように、満開の花を咲かせている。月明かりに白く、その花はほのかに発光しているように見えた。その花の中に、月を仰ぎ、笛を口にあてがった少年がいる。

明里は声をかけずに、しばしその姿に見惚れた。

笛から洩れてくる音色がこんなにも珍妙でなければ完璧だ。

「明里？ 来ていたの？」

明里の姿に気づいた彼が、笛から口を離して、彼女を見下ろす。

「うん。その笛、もっとどうにかならないの？ この丘に妖が住んでいて夜な夜な奇妙な笛の音が聞こえてくるって、隣の郷まで噂が広がっているのよ」

「そのうち上手くなるって」

リュウトは呑気に笑った。

「もう」

明里は一度膨れて見せるが、リュウトが笑っていれば、つられてこちらも笑んでしまう。

「おいでよ。今夜はとっても月が綺麗なんだ」

「木に上るなんて、お転婆だって叱られちゃうわ」

手を背中に回し、澄まして明里が言った。

「内緒にしておいてあげるから大丈夫」

リュウトが手を伸ばす。

「そんなこと言って、こないだだって郷の子たちにしゃべっていたじゃない」

「そうだった？」

惚けてリュウトは笛で肩を叩く。

「絶対内緒にしておいてよ？ 母さまが怒るとすごく怖いんだから。ばらしたら一緒に叱られてもらうからね」

明里はリュウトの手をとった。それは嫌だなあ、と笑いながら、リュウトは力強く明里の手を引いて、同じ枝まで引っ張り上げた。

あの美しい泉はもうない。

しかし、緑の芽吹いた森が見渡せるだろう。

了